

FD

report

Faculty Development

2016.3 Vol. 9

同志社女子大学

FDレポート 第9号 2016.3

CONTENTS

◆ 巻頭言 ◆

『FDレポート』第9号の刊行によせて 学長 加賀裕郎 ◆ 1

◆ 2015年度FD講習会 ◆

講演「大学教員のためのインストラクショナルデザイン入門」
..... 早稲田大学人間科学学術院 向後千春 ◆ 2

◆ 2015年度新任教員入社前オリエンテーション FDガイダンス開催報告 ◆

..... 関谷弘志、松谷容作、大倉真人、Lisa Rogers、
畠山 啓、尾玉剛士、Calum Adamson ◆ 23

◆ 本学FD推進事業について ◆

私のマナビー活用法
..... 教育・研究推進センター所長 余田義彦 ◆ 26

学芸学部教育取り組みについて
..... 教育・研究推進センター主任 松下悦子 ◆ 30

現代社会学部教育取り組みについて
..... 教育・研究推進センター主任 大津正和 ◆ 31

薬学部教育取り組みについて
..... 教育・研究推進センター主任 松元加奈 ◆ 32

看護学部教育取り組みについて
..... 教育・研究推進センター主任 片山由加里 ◆ 33

表象文化学部教育取り組みについて
..... 教育・研究推進センター主任 生井知子 ◆ 34

生活科学部教育取り組みについて
..... 教育・研究推進センター主任 山田恭正 ◆ 35

FD図書紹介『「思考」を育てる100の講義』
..... 教育・研究推進センター主任 松下悦子 ◆ 37

関西地区FD連絡協議会第8回総会参加報告
..... 教育・研究推進センター主任 山田恭正 ◆ 38

「第17回manabaセミナー」参加報告
..... 教育・研究推進センター主任 松下悦子 ◆ 40

◆ メルマガ「教研ニュース」の発行報告 ◆

◆ FD活動報告(2015年度) ◆

◆ 2016年度FD事業の日程・概要 ◆



巻頭言◆

巻頭言 『FD レポート』 第 9 号の刊行によせて

学長 加賀 裕郎

教育の充実を目標として教育開発推進センターが設立されたのは2006年4月でした。同センターから『FD レポート』創刊号が刊行されたのが2008年3月、その後、発行母体が教育・研究推進センターに代わってからも『FD レポート』の刊行が続き、早いもので、今回で第9号を出すことができる運びとなりました。関係各位のご協力に深く感謝申し上げる次第です。2016年度からの事務組織の改編に伴って、FD部門は教務部に統合され、いっそう充実した体制で実施されることになります。

近年、大学改革を求める波が高まりつつあることは、周知の通りです。中央教育審議会の各種答申をはじめ、改定された教育基本法第十七条では、政府が教育振興基本計画を出すことが謳われ、政府の方針が教育現場に入り込み、左右するようになってきました。その昔、伊藤博文は、教育は「薬石」のようなもので、すぐに効き目があるわけではなく、じわじわ効いてくるといったことを述べています。しかし現代には、その余裕はなく、教育に即効性が求められ、効果が表れる前に次の方針が出されるという事態に立ち至っています。この状況は深刻だと言えますが、だからといって、高を括ってよいわけではありません。

歴史を通じて、大学は学問教授機関であって教育機関ではありませんでした。しかし大学進学率が50%を超えた今日、学問教授機関、研究機関でありうる大学は一握りでしょう。大学は否応なく教育機関化しており、学生は生徒化しています。先ず、この現実を受け入れなければなりません。少子化が進み大学入学が比較的容易になって、入試による選抜機能は弱くなりました。今後は、比較的鍛錬されていない若者を迎え入れ、如何に彼女らを磨き上げるかが問われます。そのための様ざまな仕掛けも充実してきました。一つはICT教育の導入です。本学でも年次計画で、ICT教育のできる環境を整備しつつあります。二つ目は共同学習空間の整備です。知識は共同行為を通してこそ効果的に学ばれるという考え方が学習理論に浸透してきました。社会的構築主義という考え方も入ってきました。そこでそのための共同学習空間が求められています。本学では、京田辺、今出川両キャンパスでラーニング・コモンスの設置計画をもっています。2017年度には完成し、2018年度から使用できるようになる予定です。WiFi環境の整備も年次計画を立てて進めており、各学部学科のカリキュラム編成を含めて、効果的な教育研究が進むよう期待されております。

さらに近年は、大学内外のFD講習会の開催あるいは参加だけでなく、全学教授会とセットでFD関連の講習会が定期的に行われるようになり、かなり多くの教員が参加しております。今年度は「マナビー」という愛称の学習支援ソフトが導入され、教育に生かされるようになりつつあります。各先生方の前向きな姿勢を喜んでおります。

2015年度 FD 講習会◆

同志社女子大学 2015年度 FD 講習会次第

日時 2015年10月21日（水） 15：50～18：00
場所 知徳館 281教室

司 会
教育・研究推進センター所長
余田 義彦

- 1 開会の辞 加賀 裕郎 学長
- 2 テー マ 「大学教員のためのインストラクショナルデザイン入門」
- 3 講演講師 向後 千春 氏
(早稲田大学 人間科学学術院 教授)
- 4 質疑応答
- 5 閉会の辞 飯田 毅 教務部長

講演「大学教員のためのインストラクショナルデザイン入門」

早稲田大学 人間科学学術院 向後 千春

(開会)

司会 (余田所長) それでは、時間になりましたので、そろそろ始めさせていただきたいと思います。今日は早稲田大学から、向後千春先生に講師として来ていただきました。

向後先生 よろしくお願ひします。

司会 (余田所長) 向後先生ですが、1958年のお生まれで、現在のご所属は早稲田大学人間科学学術院の教授です。博士(教育学)(東京学芸大学)です。ご専門ですが、教育工学、特にeラーニング、それから、今日お話しいただくインストラクショナルデザイン、平たく言いますと「教えることのデザイン」です。それから、教育心理学、特に教授法、生涯学習、作文教育、それからアドラー心理学と、幅広いご見識をお持ちの先生です。日本教育工学会、教育システム情報学会などで理事や評議員を務めていらっしゃいます。ご著書は多数で、アマゾンで検索しますと18件ヒットします。今日の内容だけで、このような本も出ております。3冊持ってきましたが、非常に参考になるものがたくさんあります。

受賞歴ですが、最近のもので言いますと、日本教育工学会第27回論文賞、これは2012年で、いわゆる反転学習の設計と実践についての論文で受賞されています。それから、去年は、第2回 WASEDA e-Teaching Award を受賞されています。少し古いところで言いますと、『メディアサ



『イコロジー—メディア時代の心理学』というご著書で、日本社会心理学会、第1回島田一男賞受賞です。共著者に、本学の諸井先生も含まれていまして、大変つながりを感じます。反転学習という言葉が生れる前から、大学でeラーニングとグループワークを組み合わせた反転学習をされていた先駆者でもありまして、それでとても有名で、シンポジウムのパネリストや研修会の講師などで引っ張りだこの先生です。JMOOCの授業も開講されています。そのあたりの、最先端のお話も聞きたいところですが、今日はさまざまな専門分野を持つ全学の教員が受講する講習会ですので、もう少し、教えることの基本的なところをお願いしたい、それも、できればワークショップ形式でお願いしたいということをお願いいたしまして、大学教員のためのインストラクショナルデザイン入門というテーマでお話しいただくことになりました。以上です。

加賀学長 毎年、このようなFD講習会を続けております。また、京都では、大学コンソーシアム京都というものがありまして、そこにもずっと参加しておりますが、これほどたくさんの先生たちが出席するようになったということは、いよいよFDの時代なのだという感を深くしております。また、授業評価というものもずっとやっております。昔は授業するということで終わっていたのですが、現在は教員も評価される時代になってきたと思います。評価されると、それで点数をつけられるということではなく、それをベースにして自分の授業を改善していくということが、教員の大きな仕事の一つになってきていると思います。



さらに、最近ではあちらこちらでアクティブラーニングという言葉も聞くようになってまいりまして、しょっちゅう審議会等の答申も見ます。今日は向後先生に講師をお願いします。大変、高名な先生と伺っております。今日は2時間ぐらい、結構長いと思いますが、恐らく、ワークショップが入ると飽きないと思います。飽きないと言ったら変ですが、取り組めるのではないかと思いますので、どうぞ、2時間で、最新の知識と技術をいろいろと吸収していただけたらと思います。本日は、どうもありがとうございました。

司会（余田所長） それでは、早速お願いいたします。

向後先生 皆さん、こんにちは。早稲田大学の向後です。よろしく申し上げます。今日はインストラクショナルデザイン入門ということでやっていきたいと思いますが、これほどたくさんのFD講習会、参加人数は120ぐらいいますか、初めてです。すごいです。いや、本当にすごい。月1回ぐらいはこのようなオーダーがかかって、文科省がアクティブラーニングということを言い始めたせいなのか、FD研修会・講習会の第2波のような、少し前まで、10年ぐらい前にブームが1回ありましたね。今また、いろいろなところでFD研修会をやってくれというオーダーがかかるようになったので、第2波が来たかという感じですが、それでもやはり30人や40人ぐらいのケースが多いので、これほどの、100人を超える参加者は初めてです。すごく熱気を感じます。

私は、大学の授業では300人教室でやっていますので、実は、これぐらいの方が燃えるのです。30人ぐらいでは、こじんまりしていいのですが、やはり多ければ多いほど、自分が教えていることがその人数分だけ伝わっているという感じがあるので、100人よりは200人、200人よりは300人に一遍にやりたい

のです。早稲田はマンモス校ですから、そうした授業がたくさんあるのですが、そういう授業であっても、私語は余りさせないで、うまく授業を組み立てていくということが教員に問われていると思います。ですから、小さなゼミであっても、中規模の実習科目であっても、大規模な講義科目であっても、それぞれにいろいろなことを伝える、実質的に伝えられて、学生に知識とスキルを身につけさせる手助けをするということが、それぞれの教員に求められているのだと。もちろん、皆さん方の専門がきちんとあることはわかった上で、それをどのように伝えていくかということが重要になっているのだと思います。

今日は2時間いただきましたが、実はこのプログラムは3時間プログラムで作ってあるので、一部、はしょるところがありますが、皆さんと一緒にやっていきたいと思えます。よろしくお願ひします。

今日は、インストラクショナルデザインの考え方と、学習に関する心理学理論、それから授業設計の基本、授業要素のデザイン、このあたりまでで終わってしまうかもしれません。あとは授業の評価や、これからの大学の授業のところは少しはしらせていただくかもしれません。このような感じで進めていきたいと思えます。

この研修の進め方ですが、このような感じでやっていきます。形式は、20分で1ユニットで、私の話は15分で終わらせます。皆さんで、ふせんを使ったちょっとしたワークをやってもらって、それぞれのグループで5人から6人ぐらいいますので、グループの中でシェアをして、それから全体でシェアをするという形で、これが20分で1ユニットという形です。

これは、自分で名前をつけておいたのですが、「マイクロフォーマット」というもので、20分から30分ぐらいの一つのユニットを組み合わせていくことで一つの授業を作ります。授業も、60分授業の場合も、90分授業の場合も、2時間の場合もありますので、そのように考えると、一つのユニットを小さく作っておいた方が、組み合わせが簡単です。この形を使えば、どのような履修科目においても、知識の伝授型の科目においても使えるので、これを、私の授業や研修会では使っています。今日はこの形式そのものを、私の授業の1サンプルとして皆さんにもぜひ応用していただきたいので、そのあたりの視点から見ただけかと思っています。

それでは、早速、内容の方に入っていきたいと思えます。最初は、インストラクショナルデザインの考え方ですが、ここでとりあえず15分。タイマーをかけておかないと必ずオーバーするので。ここで、私が20分、30分しゃべってしまうと、あの先生はうそつきだということになるので、一応、これを15分でセットしておきます。

最初は、教えること、学ぶことは非常に日常的な行為なのだということです。われわれはいろいろなことを学んできたわけですが、人から教えら



れる、例えば母親や父親から何か教えられ、小学校・中学校・高校で先生から何かを教えてもらい、それから、ピアノの弾き方を教えてもらう、あるいは、私はテニスをするのですが、テニススクールに行ったらテニスの仕方を教えてもらいますね。ギターも弾き方も教えてくれますし。そういう形で誰かが誰かに何かを教えるという行為が、基本的には、社会をうまく回すためのエンジンなのです。

ところが、その教え方というものを一体われわれは学んできたのかということ、そういうことはないです。学校の中を見ても、何とかの教え方という科目は1個もなかったわけです。では、教育学部に行けばそういう授業があるかということ、これもあまりないのです。先生になるということで、実習校に行ったら型を習っていくわけですが、実質的にどのように教えればいいのかということには習っていません。私も、自分の子供がいるので、公開授業などで行くのですが、大体はうまくないです。ということで、教え方について、われわれは実質的に学んでいないのだということがわかります。

その教え方を、どのようにすればいいのかということ、学術的に考えるのが、インストラクショナルデザイン (ID) という領域です。教え方、それからコース全体のデザインの仕方を専門にしたものが、インストラクショナルデザインということです。この中では、教え手、つまり先生というものは、全体のコースの中のごく一部、一つのパーツにすぎないということです。ですから、ここに立って、少し高いところで私は話しているので、一見この場を支配しているように見えますが、そういう考え方そのものがインストラクショナルデザイン的ではないのです。それは、1980年から1990年ぐらい以前の話で、ティーチャーセンタードという、教師中心でクラスを回すという考え方で、それは終わっています。今は、ラーナーセンタード、学習者中心で授業が展開するのだというものが主流になっています。しかし、学習者中心といっても、実質的にそれはどのようにやればいいのかということは、実は余りよく考えられていません。

例えば、グループワークをすれば「学習者中心だ」、何かプレゼンテーションをさせれば「学習者中心だ」などとかんたんに考える人もいるかもしれませんが、グループワークを回すということとはとても難しいのです。特に、これだけ大勢いると、私が一つ一つ見るわけにはいきません。ですから、そのあたりの設計をすること自体が重要です。先生があくせくと働くのではなくて、全体の設計をきちんとやれば、授業が自然にうまく回るようにするということがインストラクショナルデザインの考え方です。ですから、決して、先生が壇上でどんと構えていて全体をコントロールするという立場ではなくて、授業の設計そのものが、そこにおけるルールそのものが、授業がうまく回るようになっていなければなりません。それを考えることが先生の仕事ですね。それがIDの考え方ということになります。

すでにたくさんの方のインストラクショナルデザインの本も出ております。それから、熊本大学大学院の鈴木克明さんという先生がいますが、余田先生もそうですが、このあたりが大体同じ世代で、当時、余田先生と鈴木先生と私が出会って、それから、これから日本の教育をどうしようかと考えていたのです。もう一人、理科大の清水先生がいましたが、その4人ぐらいで梁山泊のようなものを作って、大革命を起こそうというような——およそ20年ぐらいですか——妄想を抱いていたころがありました。4人それぞれにいろいろな仕事をしてきましたが、だんだん、素地ができ上がってきたと思います。それが、一つは、大学の存在そのものが問われているということと、それから、新しいテクノロジー、端的に言えば、インターネットによるeラーニングです。これが、普通に使えるようになってきました。この条件がそろってきたので、これから教育は急激に変わります。

私の大学ではeスクールという、インターネットで100%、124単位全部取って学士号を授与するコースがありますが、これを、2003年ですから、10年以上前に開設しました。すぐにライバルが出てくると思っていたのですが、なかなか出てこないのです。それは、まだインターネットの破壊力がどのようなものをわかっているのか、教室にいますと、わからないのです。けれども、家に帰ったり、町に出ると、どれほどインターネットの威力がすごいかわかります。

大学も、同じように影響を受けないわけにはいきません。既に、アメリカではフェニックス大学、学生数は30万人です。学部と大学院を持っていますし、それから、州のウエスタンガバナンス大学も数万人と

いう単位で学生を持っています。それは、どこにいてもできるわけです。それから、インターネットなら個別指導もきちんとできるわけです。だから、条件は整っているということになります。けれども、先生の責任がまだ問われないのはなぜかという、先生が教えることと、授業を受けて学生が何かを学ぶこととは、なかなか1対1に対応できないのです。先生がいいから授業がよくなるわけではなくて、たまたま、学生にやる気があって優秀だから彼は勉強するので、それは先生のおかげではないのです。それから、先生の方からしてみれば、全然勉強しない学生がいるということは、彼らが怠けているにすぎないという言いわけは常に成立するのです。ですから、私の責任ではない、彼らが怠けていることが悪いのだと言うわけです。これで大体の人が納得してしまうのです。ですので、私がどのような教え方をして授業を作るかということと、学生がどのような学び方をして自主的に自分で学んでいくかということとは、なかなか対応がつかないのです。そこにわれわれは常にあぐらをかいているわけです。学習者の責任だと。でも、インストラクショナルデザインは、そんな言いわけを許さないのです。彼らが勉強しないのは全て100%、教員の責任なのです。そういう前提条件からスタートします。

ですから、授業を成立させて、学習が自主的に起こるということを、全部われわれが引き受けなければいけないということです。学生がいかに怠けようとも、怠けさせるような授業をする先生が悪いのです。それから、やる気が起こらない学生がいるということ自体が先生の責任だということになります。だから、そこからスタートしようということです。これが「学習者検証の原則」という、インストラクショナルデザインの基本原則です。要は、全部の学習者、私がかちんと教えたかどうかは、きちんと教えたつもりになっているかどうかということではなくて、学習者がきちんと学習したという証拠をもってしか証明できないということです。

熱心な教員がいます。熱心な教員はだめなのです。なるべく楽をしなければ。これからは時短ですから。時短なので、残業してはいけません。なるべく冷静に全体の授業設計をして、このとおりにやっていけば無理なく学習できるようにしなければいけません。けれども、熱心な教員は無理なことを言いがちなのです。学生も忙しいですからね。授業数はたくさんありますし、アルバイトもしなければいけませんし。というわけで、熱心な教員ほど「教えたつもり」の罠にはまります。この「つもり」のところを、元ICUの沼野先生は意図的教育観と言います。「私は教えたつもり」「一生懸命やったつもり」というものを意図的教育観と言います。それは通らないのです。そうではなくて、成功的教育観、要するに、学生の方が学んで、うまく成功しましたという証拠をもって、教育したということが実証されるということです。ですから、正しい教え方はないのです。ただ、効果的な教え方と、そうではない教え方があるだけです。

私は、テニスをやっているのですが、基本的には、テニスは基本は同じだから、どのコーチについても同じようなレッスンができると思っています。しかし、そんなことは全然なくて、AというコーチとBというコーチについたら、天と地ほどの教え方の差があって、それは結局、私がかうまくなるか、下手なまま終わるかということによって全部証明されてしまいます。そのあたりはシビアなので、うまいコーチのところはどんどん生徒がつくわけです。下手なコーチのところは閑古鳥です。誰もつきません。われわれ教員も、そういう目に遭うべきなのです。けれども、必修科目や授業などのいろいろな外的条件で一応学生数が集まるので、何となく授業をやってしまうわけです。学生は、自分でなければ、保護者が全部お金を払っているわけですから、1コマ何千円などがかかっているわけですね。それに見合うための授業をしなければいけないと思います。それはどのような授業かといま



すと、効果的な授業をしなければいけないということです。

それからもう一つ、最後に、インストラクショナルデザインの特徴ですが、改善のサイクルがあります。授業というものは毎回、毎年大体繰り返してやるわけですが、1回やると、いろいろなところの欠点が見えます。うまくいったのかどうかは、見ればわかるのです。もしも自分の授業がうまくいっていると信じ込んでいる先生がいれば、それはおかしいです。常に、不足の部分があるのです。今年はこのようなところで工夫したら、その工夫の部分はうまくいったのですが、それ以外の部分で効果が薄れたなどですね。パーフェクトな授業はないので、常に妥協の産物なのです。個別指導をすれば、全体の底上げがうまくいかなくなるし、全体の底上げをしようと思うと、成績トップの人たちが不満を漏らすわけです。このバランスを考えることがわれわれの仕事なので、いつでも改善の余地があるということです。

最終的には、授業の評価をしています。これも、授業評価のアンケートのようなものを取るのではなくて、学生が実質的にどのような知識とスキルを身につけたかということだけで測られています。それが、学生にとっては満足のいく授業であるし、他の友達に「この授業はいいよ」と推薦できる授業だと思います。その評価を見て、それは一体、実施の段階で不足だったのか、あるいは、そもそも科目の内容を開発する段階で不足だったのか、それとも、授業のデザインそのものですね、今日やっているように、講師が15分しゃべって、それからグループワークに行くような授業をデザインしたとしたら、それがうまくいったのか、いかなかったということですね。このようなところで振り返って改善していくということが大事かと思えます。

今で14分でした。この長さも心理学的な裏づけがあって、大体、15分ぐらいで飽きるのです。90分間しゃべる先生がいるではないですか。聞いている方は地獄ですよ。そこで、学生はパソコンをやったり、スマホをいじったり、隣の人と私語したりするのですが、それは必然です。彼らは正しいことをしているのです。15分で私の集中力は切れましたということを証明しているのです。ですから、それを叱るのではなくて、それに対処して、こちらのデザインを変えていくということが大事かと思えます。

そこで、最初のワークをやっていきたいと思うのですが、皆さんが身近で観察する教育、皆さん全員、授業をやっていると思えますので、自分の授業でもいいですし、他の先生の授業をたまたま見てしまったということでもいいのですが、改善すべきだと考えるところを一つだけ提示していただきます。ここが少し気になるので、改善したいということ一つだけ挙げていただきたいと思えます。今回は黄色のふせんを皆さんに1枚ずつ配っていただいて、書き込んでいただきたいと思えます。その後で、グループの中でシェアをします。書き込み時間は、2分間でお願いします。では、お願いします。常々、このような授業のこの点は少し改善しなければいけないと思っている、ちょっとしたことで結構ですので、思いつくことを一つ書いてください。最初に言いましたように、正解はありません。気になることだけ。



(グループワークの時間)

今で2分間です。大体このペースで書いてもらいます。それほどたくさん書けませんが、メモぐらいは書けますね。それでは、これからグループの中で発表していただきたいと思えますが、これも厳しいきまりがありまして、まず、グループの中でじゃんけんをしてもらって、勝った人が1番目です。時計回りに回してください。持ち時間は1人1分しかありません。ですから、長くしゃべってはだめです。こちらでキューを出しますので、「はい、2人目、行って

ください」と言いますので、話を即座にまとめて、その次の人にバトンタッチしていただきたいと思います。では、最初にじゃんけんをお願いします。

(グループワークの時間)



向後先生 どうもありがとうございました。いかがでしょうか。グループワーク中はうるさいですね。基本的に、私の授業はずっとそうですが、うるさいのです。グループの中でしゃべっていても、発表しても、なかなか聞こえづらいという苦情が非常に多いです。でも、それは仕方ないですね。このような感じでグループワークをやります。

グループワークのコツを言っておくと、たくさんの時間を与えないということです。例えば、グループワークをやるという先生で、よく陥りやすいミスは、例えば30分ぐらい与えてしまうのです。「こういうことをやってください。グループの中でいろいろ話し合って決めてね」というようなことを言って30分与えてしまうのです。絶対にうまくいきません。最初の3分だけは真面目にやりますが、それ以降27分間は全部ぐだぐだです。だから、仕切っていくのは先生の仕事なのです。

私は今、6分間、皆さんのグループワークにお任せしたわけですが、とても楽です。見ているだけだから。見ていて、皆さん、きちんとしゃべってくれてうれしいなと思ってます。このように、自分がしゃべる時間、15分しっかりしゃべったら、それ以外は自分が全体を見渡す時間を作ることをすればと思います。そうすると、こちらも、次は何をしゃべろうかというエネルギーが蓄えられますし。これが、もしずっとしゃべっていると疲れてしまいます。聞いている方も疲れますが、話している方も疲れます。

これをやった後、このまま次に行ってしまうと、何となく不満が残るのです。なぜかといいますと、自分のグループの意見は全部聞けましたが、他のグループの意見が聞けないわけです。ですので、一つか二つのグループを指名して、全体シェアということで発表してもらいます。そのときに、当てやすいグループを当てるのではなくて、きちんと公平に、さいころを振って決めます。これは正十面体のさいころです。0から9まで数字が振ってあるのです。これはAmazonで買えますので、ぜひ、皆さん持っていただきたいと思います。これを振るのです。そうすると、1と6が出ましたので1列めの6という感じで、偶然の確率で、1、2、3、4、5、一番後ろですね。マイクを回してもらって、1人ずつ、どのような話をしたかを簡単に紹介してください。では、お願いします。じゃんけんでは勝った人からお願いします。時計回りです。

A 大教室の場合の利用ですが、やはりどうしても教師がしゃべりがちになるということで、どうしたらいいかという話でした。

向後先生 ありがとうございます。

B テーマに応じて、学生の理解や興味を深めるような教材や資料作りを話しました。

向後先生 資料や教材作りですね。ありがとうございます。

C 私の方では、社会科学が一応テーマなので、まず、学生さんに社会事象に関心を持ってもらいたいということがありますので、ビデオなり、新聞記事なり、プリントなり、関心を持たせる方法について悩みます。そんなことでした。

向後先生 ありがとうございます。

D 私からは、まとまった説明をしたときに、学生が寝ないように、要所要所におもしろい小話を挟むにはどうしたらいいかということをお話していました。

向後先生 小話。ありがとうございます。

E 大教室における私語をどのように扱えばいいかということでお話をしました。

向後先生 ありがとうございます。これは、一つ、グループを選んで、全体シェアで話してもらっただけなのですが、同じようなことを言っているということもわかりますし、自分のグループで出なかった意見もまた拾えるという形で、かなり満足度が高くなります。そして次のセクションに行くという形なので、その前に少しだけ先生からコメントを入れると、またこれも満足度を増すことになります。

今で言うと、例えば学生の関心をどのように引いていくかということや、私語が多い、それから、どうしても自分の話が長くなってしまふなどのようなものがあるのだということです。要は、話を短くすれば、私語はなくなります。それから、今のように、私語ではないのですが、学生がしゃべる時間を作れば、私語はしなくなります。そこで満足しますから。1分間だけです、自分がしゃべったということで満足します、それ以外の時間はきちんと聞いていられるということです。でも、それにも限度があるので、15分間でやめるということです。そうすると、集中力が続きます。集中力が続くから、先生の話が頭に入って、その次のグループワークできちんと自分がしゃべれるということです。自分がしゃべれるということで、自己効力感といいますか、自分はすごくできるのだという感じが出ますね。そうすると、またもう1回先生の話の次のセクションで聞いて、きちんと自分の考えをまとめて話したいというようになってきます。

ですから、90分の授業をこのように構造化するということです。15分しゃべって、2分間で何かを書かせて、6分間シェアして、6分間全体でシェアして、そして先生のコメントというように、1分、2分の

単位で全体の授業を構造化していけば、無理なく進めることができます。これはすごいマジックなのです。90分間与えられたから、それをどうしようかと考えるから大変なのであって、細かく区切っていけば、どのような内容であっても、このペースで進めれば、うまくいきます。それは、人間がそのようにできているからです。

では、次のセクションです。次は、学習に関する心理学理論ということで、難しそうですが、要するに、教えることとは何なのかということです。われわれは何かを教えると簡単に言いますが、例えば、自転車の乗り方を教えることと、交通法規を教え



ることとは全然違いますし、それから、道路で自転車に乗るときにどんなことに気をつければいいかを教えるということは、全然違う話です。これは3つに分類できると言われています。

ブルームの3分類と言われていますが、まず、運動技能ですね。これは知覚と運動です。これは、今言ったように、自転車の乗り方や、それからタッチタイピングなどは知覚運動学習です。ポイントは、熟達すると、言語情報がでてきません。ですから、自転車に乗るとき、「ああ、バランス取って」などと最初のうちは言いますね。「ブレーキはこうやってやんなきゃいけない」「あ、ペダル踏まなきゃいけない」などと言語情報が入るのですが、そのうち、なくなります。それが熟達化したという証拠です。それが、運動技能を教えるということなのです。

その次は認知技能です。頭の領域ですが、記憶や理解や問題解決です。これをわれわれはずっとやってくるわけです。小学校の高学年ぐらいから中学校、高校、大学、ずっとやっているわけです。認知技能を教えるということが次です。

最後は態度技能。心の部分で、これまでは態度技能と言っていました。最近是非認知技能という用語が定着しそうです。要するに心の部分で、何かを頑張ろう、粘り強くやろう、集中してやろうというような技能は、知識でもないし、あるいは体の動きでもないのです。心の動きなのです。だから、今この授業を頑張ろうと決心することは、自分で決めなければいけないのです。それもまた技能なのだ、能力なのだというのが、最近の心理学の捉え方です。

ですから、大学もそうですが、学校全体として、知識やスキルを身につける以外に、ここで、この時間、集中して頑張ろうという態度を身につけさせる方が実は大事なのです。でも、それは直接教えることができないので、なかなか難しいということです。学級崩壊などもあります。それはまさに態度技能が劣化したことによる結果ですね。ということで、運動技能、認知技能、態度技能の三つがあるということがわかりました。今、タイマーをかけることを忘れてしまいました。あと10分です。

最初に運動技能の教え方ですが、これはとても簡単なのですが、皆やっていないのです。一つは、スモールステップでやってくださいということです。もう一つは、即時フィードバックしてくださいということです。

スキーを教えられた経験のある人は結構いると思います。いきなりスパルタで、スキー靴を履いて、スキー板を履いて、少し登って、とても緩やかな斜面なのですが、初心者にとってはこの緩やかな斜面が地獄です。なぜなら、立てないのですから。とまることもできません。普通に重心を置いたら、下の方ですうっと行くわけですね。スパルタの先生は「おう、そこから、ちょっとおりてこい」と言って、「俺は、下で待ってるから、見てるから、来いよ」という感じでやる人がいます。そうしたら、すうっと行ったら、とまり方も知らないで、このまま行ったらスピードがどんどん出て危ないということで、自分で尻餅についてとまるということになります。それは非常に不格好です。「そのように転びながら技能を身につけるのだ」と、その先生は言うわけです。それはだめです。絶対にだめです。

先生に限らず、教える人は、自分ができなかったころのことを全て忘れていているのです。それはきっと嫌な記憶だから忘れるのだと思います。自分ができなかったころは、劣等感にさいなまれるではないですか。ですから、それは記憶から消したいだけです。今できている自分を認めたいのです。でも、本当の初心者は、その時点のゼロの状態ですから、その人に対しては本当にやさしく扱わなければいけません。それがスモールステップです。最初は非常に簡単なところから入って、誰もがうまくいくように設定するので。ですから、今のスキーの例で言えば、平らなところで全てやらなければいけません。平らなところですら、少しバランスを崩したらすぐに倒れてしまうわけですから、そこで必ず全員ができるような形で進めていきます。必要最小限の単位のトレーニングをして、少しずつ進めていくということです。

また、自転車を教えることも、子供が生まれると大体、お父さんの最初の仕事になるわけですが、大体、お父さんは教え方が下手くそですから、会社でもそうですが、部下を泣かせたりするのです。子供を泣かすことはとても得意ですから、「パパがここをちょっと持っているから、乗ってみろ」という感じで、「行

くぞ、行くぞ」、ひゅっと離して、倒れるわけです。ドギーンと泣いて子どもは「もう絶対自転車、乗らない!」となるわけです。

それを、うまくやりたいのです。最初はブレーキも使わないし、ペダルも足を乗せません。少し足を蹴って進む、そこで足を着いてとまるというところから始めます。これなら、子供がどれほど臆病であっても、怖がりであっても、うまくいくのですね。1 m ぐらい進んで、足で立ちます。そうしたら2 m ぐらい進みます。これがスモールステップです。そうしたら、今度は足でとまることはやめにして、ブレーキを握って、それでとまってから足を着きます。これは本当にスモールステップです。全然失敗しないのです。できる、できる、できる、できる、あ、こげるといふ感じになってくるのです。これがスモールステップです。

ですから、どんなことを教えるにしても、このスモールステップの原則は守っていただきたいのです。どれほど簡単そうに見える課題であっても、学習者に渡すときには、細かく砕いて、誰もが成功できるようにしてほしいのです。

ところが、先生は自分を偉く見せようと思うものだから、わざと、少し難しい課題を出すのです。失敗させて、「おう、できなかったか。じゃ、俺が教えてやるから」と言うのです。それはだめです。でも、なぜか知らないけれども、やってしまうのですね。先生の仕事は、最初は失敗させないことです。後になって、十分に自信ができたなら、半々の確率で失敗させてもいいのです。それはゲームになります。うまくいくときと、うまくいかないときが半々の確率であれば、チャレンジ精神が出ますね。でも、それは最初の段階ではだめです。最初は100%うまくいくように教えるのです。

ここですね。後半は選択的に強化ということがそれです。最初はスモールステップなのですが、だんだん、ステップを大きく広くしていてもいいのです。でも、何でもそうですが、例えば、A という技能と B という技能をそれぞれ独立に教えて、それから A + B という技能で連続してやりなさいというようなことになると、急に難しくなったりします。だから、自転車の場合も、こぎながらカーブを切るということは結構難しいのです。真っすぐ行くことと、カーブで重心を移すということは結構難しいのです。このときに、たまたま失敗して転んでしまうこともあります。その場合はもう1回、もとに戻すようにします。「まだカーブは早いよね」と言って、真っすぐで十分に自信をつけさせてからカーブに行くという形です。ステップを上げたら、一時的に基準を緩めるということがそうです。

それから、もう一つは即時フィードバックですが、これは、何かをやらせたらすぐに、それはオーケーなのか、あるいは、うまくいかなかったら、どこを工夫すればいいのかというフィードバックを出してほしいのです。それは、教える方が学習者をきちんと見ているということの証拠です。ですから、この段階ではかなり個別指導ということになります。個別指導ではなくて、大勢のところでもやらなければいけないということであれば、ペアを組ませてください。ペアを組んでもらって、お互いにフィードバックする、それがいいようです。自分ができないことであっても、他の人ができているか、できないかはわかります。

またテニスの話になるのですが、私はテニスを長くやっていますが、下手です。でも、うまいプロと調子の悪いプロとはきちんと見分けがつくのです。なぜでしょうね。絶対できるのですね。なので、フィードバックは、素人であってもできます。うまくいっているということと、ちょっとおかしいということは、きちんとフィードバックできますので、そのようにペアを組んでやってもらうということが大事かと思えます。

さて、今の分は運動技能の教え方で、次は認知技能の教え方です。このあたりは全て、知識と理解と問題解決、これです。ですから、小学校の高学年から中学校、高校、大学、ずっとこれなのです。座学でやっていることは全部これです。どんな知識を与えて、どんな理論があつて、どのようにしたら問題解決できるかということ、われわれは教えているわけです。

この教え方は、ポイントは幾つかありますが、1つ目は、よい説明をするということです。われわれ

は何かの専門家なので、その専門的知識については膨大なものがあるわけです。でも、それを普通の学生にぼんと渡して、理解できるわけがないのです。ですから、先生の仕事とは、自分の知っていることを伝えるのではなく、自分の知っていることを、いかにそぎ落として一番のエッセンスだけを伝えることです。

だから、90分間、授業中にたくさんしゃべってしまうのは、先生の悪い癖なのです。いや、わかるのです。それで飯を食っているわけですからね。わかります。でも、それは学生にとって何の関係もないことです。あなたが何の専門家であろうが、その学生にとっては何の関係もないのです。そこで、その専門家がやるべきことは、この専門で一番のおもしろいところはここと、ここと、ここだよということで、食べやすくして与えること、提示することです。そうしたら、「すごい。おもしろい」と言ってくれるではないですか。そうすると、私は喜ぶのです。とても喜びます。なぜなら、その専門的知識を認められたし、それでいくらかの貢献をしたことになるわけですから。専門知識を、どのようにそぎ落として一番のエッセンスだけを伝えるかということが重要なのです。

記憶の仕組みをみると、普通の人にはたかだか五つぐらいのことしか一度に覚えられないので、全部を話したとしても、後には何にも残りません。最後に言った言葉だけが残ります。どのようにポイントを絞るかということで、この90分間の授業ではこれとこれとこれだけをエッセンスとして伝えたいということを言って、それを深く伝える、何回も伝える、それからいろいろな例を出して伝えるということが大事です。羅列してもだめです。

それからもう一つは、素朴概念とバグ修正というものですが、大学生になると大体のことは知っています。インターネットもあるし、本も読んでいるであろうし、雑誌・新聞も読むだろうし、人からいろいろな話も聞くであろうということで、大体は知っているのです。しかし、大体知っていることというのは間違っているのです。だから、われわれはまず、大体知っていることを聞き出して、いかにそれが間違っているのかを言います。それをバグと言います。バグとはコンピュータープログラムの中の間違いですが、素人が思っている知識にはたくさんのバグが含まれているわけです。あなたが今そのように考えている、思っている、信じていることは、どのように間違っていて、将来どのように困ることになるのかということを書いてあげるのです。そのことによって、新しい知識が入りやすくなります。われわれの敵は、学生が知らないことではなくて、間違った知識を持っていることです。間違った知識を落とすことが一番大変なのです。そうすると、新しい知識がきちんと入るので、そこを注意するということです。

それからもう一つは、領域固有性と転移ということですが、これも難しい言葉ですが、専門家であればあるほど、専門用語の中で暮らすのです。世界を専門用語の枠組みで捉えるようになるのです。けれども、学生にはそういう枠組みがないのです。ですから、われわれが何かを教えるということは、ただ知識を教えるのではなくて、われわれが専門としている世界観を伝えなければいけません。その世界観の中にどうやってこの人を引き込むかということが求められています。物理学であれば、物理学の枠組みで世界を見るとこのようになる、心理学であれば、心理学の枠組みで見るとこのようになる、教育学で見れば、教育学の枠組みでこのようになるということを教えたいのです。それが、彼らに何か新しい知識を与えたということになるのです。ただ何を覚えたということではなくて、枠組みが大事です。彼らは、普通の世界、素人世界でしか世界を見ていません。何かを学ぶということは、何かの専門の世界観で世界を見ることができのです。そこに引き込んでいただきたいということが一つになります。

最後は態度技能ということで、これは、実は余り正解がないのです。インストラクショナルデザインの中でも、これというものがありません。なぜかといいますと、例えば、頑張る、集中する、原則を決める、自分にルーチンワークを課すなど……。野球のイチローは、自分にルーチンワークを課して、それを日々やっているわけです。それが態度なのです。これを身につけることが非常に重要だと言われていますが、実は、これは直接的には教えられません。なぜなら、ルーチンワークをやれと言うことは簡単ですが、そのルーチンワークをやるということを決断するのは本人自身の問題だからです。

ですから、われわれができることは、この教室においてはどのような態度が価値を持つかということ

表明することだけです。例えば90分間の授業であれば、そこに集中してやってくれる人を高く評価したいということを表明するだけです。ぐだぐだやっても意味ないではないですか。そういうことはわかるのですが、そのようにきちんとやってくれる人がいい人なのだということを、先生自身が日々表明するということになります。だから、大学の中で、一つの文化的な価値というものが一貫しているところは強いです。どのような人がその中で価値を持つかということを皆が共有しているということです。ですから、このようなくあいに、教員同士はなかなか話す機会がないと思いますが、このような機会をなるべく利用して、どのような人たちを私たちは育てたいのか、どこに価値を置きたいのかということを常にコミュニケーションしておくことが大事かと思えます。

次のワークにいきましょう。今、ざっと話をしました運動技能、認知技能、態度技能、それぞれの教え方のポイントを解説しました。全部は消化し切れませんと思いますので、一つ、ピンときたものを挙げていただきたいと思います。今度は青のふせんを使って2分間でメモしてください。では、お願いします。

(グループワークの時間)

それでは、2分経ちましたので、グループの中でシェアしたいと思います。先ほどと同じようにじゃんけんしていただいて、一番勝った人から時計回りに1分間ずつ回してください。お願いします。

(グループワークの時間)



向後先生 ありがとうございます。それでは、グループを一つ選んで、全体にシェアしていきたいと思います。さいころを振ります。4の3、このグループです。お願いします。

F 失礼します。私は、運動技能のお話の中で「自分ができなかったことを忘れない」という言葉があって、そこで、今、看護技術にかかわることがあるのですが、今なら簡単にできたことを、いざ口で説明しようと思うと難しいと思う部分がたくさんあるので、そこを挙げさせていただきます。

向後先生 ありがとうございます。

G 私は、運動技能のところのスモールステップというところがとても大切だと思いました。やはり、学習者が自分で認識を整理しながら、少しずつステップアップするということは、学習者が認識を整理していけますので、学習者にゆとりができるというところで、オリジナリティーなども生まれてきたりするのではないかと考えているので、大切だと思いました。

向後先生 ありがとうございます。

H 私は認知技能のところを取ったのですが、ここは看護学部の若手教員ですが、つい先日あった基礎看護学実習というもので、たくさん、教員が学生について、教員はすごく一生懸命いろいろなことを説明し

たのですが、結局は、そのエッセンスや、今まで「看護師ってこうなんだろうな」と思っていたことを、少しずれているものを修正したり、それぐらいしかできなかったのではないかという思いもあって、今日の今のお話でそれをすごく感じました。

向後先生 ありがとうございます。

I 私も、認知技能のところの「言いたいことや話したいことをたくさん話すのではなくて、大切なエッセンスだけを話す」というところが一番印象に残ってしまっていて、私も学生に、自分の言いたいことや話したいことを一生懸命たくさん伝えたつもりなのですが、では、大事なところが最後に学生の中に本当に残っていたのかと思うと、なかなか、それもどうだったのかと思うところもあったので、要らないところはそぎ落として、大事なところだけを話すということがとても大事なのだということを学びました。

向後先生 ありがとうございます。

J 私も認知技能のところ、幼少期から学んでいるけれども、やはりなかなか身につけにくいところというところで、今回このお話を聞いて、ついつい、自分が知っていることをどんどん伝えていってしまうのですが、ポイントを押さえて重要なところだけを伝えるということや、あえて、学生から知っていることを引き出して、その間違いを伝えることによって定着させていくということが、ピンときたところですね。

向後先生 どうもありがとうございました。やはり運動技能ではスモールステップということ、それから、認知技能においてはエッセンスを伝えるということと、あとは相手の誤った概念、バグと言いましたが、バグを見つけ出して、それを修正していくということですね。学生の力を信頼するといいますか、そういうことが大事です。ある程度までわかっているはずなんです。ちょっとのバグが入っているので、あとはそのバグを修正していくだけで、こちらが伝えたい内容の知識を伝えることができるのだということです。お互いに最小の努力で、適切な知識、それからスキルを身につけたいわけですね。それが、バグの修正であったり、あるいはスモールステップで教えていく、即時フィードバックでフィードバックをかけるということだと思います。これらのことはゴールデンルールなので、何を教えるときでも通用します。ですので、そういう基本的なところをやっていただきたいと思います。

さて、あと25分ぐらいしかないんです。元々、これは3時間プログラムで作ってあるので、全部はできないということだったのですが、もうワンセッションやって終わりにしたいと思います。もし時間が5分、10分あれば、質問をお受けしたいと思いますので、質問がありそうな方は考えていただきたいと思います。

それでは、最後のセッション、授業設計の基本というところに進めていきたいと思います。最初に説明したいことは、授業の要素ということです。授業と簡単に一口で言いますが、それは部品に分解できます。これは私のオリジナルなのですが、「ロケットモデル」というものを考えました。ロケットにはまずエンジンがなければいけません。エンジンとは何かというと、学習者が学習しようとするニーズです。これがエンジンになって授業が動くんです。ですが、それぞれの学生のニーズはばらばらですので、それを一つの方向に定めないとはいけません。それが、教員が決めるべき学習ゴールということになります。ですから、操縦席に当たる部分がゴールです。ニーズはエンジンで、わっとふかすわけですが、方向性は定まらないので、ゴールはわれわれが決めるんです。

そうすると、この胴体の部分は一番重要な部分ですが、ここが活動になります。以前であれば、ここは教員が何をしゃべるかということだったんです。この活動は教員の活動だったのですが、ラーナーセントラードになったので、学習者の活動、学習者が何をやるかということがボディになります。

一つめの翼がリソースということで、ここは教科書やスライド、そして教員がしゃべる内容です。学習資源とは、教材ということですが、先生がしゃべる内容は教材の一部にすぎないのだということがインストラクショナルデザインでの位置づけです。ですから、それはなるべく短くしたいのです。教員がしゃべる分量を短くすることによって、学習者の活動の時間が長くなるというロジックです。いずれにしても、90分という中で全てのことをしなければいけないので、時間との戦いなのです。ですから、先生がしゃべる分量を短くして、学習者が活動する時間を長くするということです。

もう一つの翼はフィードバックということで、活動させたのであれば、必ず、それに対してフィードバックをします。活動させっ放しのグループワークはよくないです。それから、例えば大学ですと、レポートをよく書かせますね。レポートを書かせた後、例えば90点や80点などと点数をつけて返すわけですが、レポートのどこの部分がよいのか、どこの部分を修正すべきなのか、それで最終的には80点ですということをフィードバックしなければいけません。点数だけのフィードバックでは不十分です。多分、点数だけでは、どこがよいのか、どこが悪いのかがわからないので、次に書くレポートも同じように80点です。100点になる可能性はありません。ですので、どこを直すべきなのかということをしちゃんとフィードバックしなければいけないのです。

先ほどの看護の例であっても、看護の最初の基本技術をやるときに、あなたはどこを修正すればもっとうまくなるのかということをしちゃんとフィードバックしなければいけないのです。それは個別にしかできないことなのです。なぜなら、いろいろな形で間違えますから。いろいろな形で不十分です。どこが不十分なのかということを見て、それでフィードバックしなければいけません。ですから、右側の翼のフィードバックは非常に重要です。活動をさせたなら、それに対するフィードバックは必須です。

ですから、簡単にレポート課題を出さないでほしいのです。レポート課題を出すのなら、全部に赤を入れるという覚悟を持ってください。それが嫌なら、クイズをやるといいです。クイズであれば、自動採点になりますから。でも、クイズや穴埋め問題を作ることは面倒くさいですね。だから、何々について論ぜよなどという方が簡単なので、レポート課題を出してしまうのですが、それは後で大変なことになるということです。でも、ロジックの通った文章を書かせることは大学教育の一つの目標なので、いずれにしても、文章を書かせなければいけません。でも、その文章を書かせるときには、きちんとフィードバックしなければいけません。

そうすると、普通の授業で、1万字で書いてこいなどというレポートは絶対あり得ません。たかだか1,000字です。1,000字のレポートであれば、A 4判の紙に印刷して、1ページで、一目で見られますので、どこをチェックするということはきちんとできるはずで、私のレポートも最大1,000字です。1,000字以内で書け、それ以上は書くなと。その方が難しいです。だらだら書くよりも、1,000字でまとめの方が難しいのです。でも、1,000字で1回書けるようになったら、それを何回も繰り返せば、長いレポートであろうが、卒業論文であろうが、書けることになります。

最初にニーズをやるのですが、これもいろいろなレベルのニーズがあります。まずは学習者のニーズでやって、Aさんという人が、自分がこうなりたいのですが、今ここまでできるということがあれば、これがニーズになります。例えば、英語はこれぐらい読めるのですが、もう少し難しい英語も読みたいということであれば、それがギャップになって、ここがニーズになるのです。でも、それは個人別にいろいろなニーズがあるのです。ですので、その次の段階として、この学校での、この大学でのこの科目において、どのようになるべきかというニーズ、この設定をすると、このギャップが、学生は今ここまでできているので、このようになりたいというものが決められれば、ここがニーズになります。そのようにして決めていきます。ですから、このようになりたいという知識やスキルのレベルをまずこちらが設定することが必要です。

社会のニーズはこの場では考える必要はないのですが、社会全体で決めなければいけないので、例えば大学の高等教育を卒業した人がどれぐらいの能力があるべきかということは社会が決めることです。これ

は全然期待されていませんが。企業からは全く。もう本当に困ったものです。でも、これをきちんとやらないと、大学の組織そのものが社会からそっぽを向かれるということになりかねません。

ニーズが決まったら、次はゴールを決めなければいけないのですが、簡単には、そのニーズがここまでできるようになるということが特定できれば、それについてのテストを作ることがゴール分析になります。ですから、最初にわれわれがやるべきことは、この問題が解けるようになることがゴールという、この試験問題を作ることです。そこをいいかげんにすると、適当なことを教えて、最後は適当なレポートを出させて終わりということになります。しかし、これについて1,000字で述べよというレポートの問題ができれば、何を教えるべきかということが、逆算できます。1回目はこれ、2回目はこれ、3回目はこれ、そうするとこの1,000字のレポートはパーフェクトに書けるはずだということが見えます。ですから、そのようにすべきなのです。ゴール分析をするということはそういうことです。ですから、最初にテストを作ってください。

テストは、ペーパーテストに限らず、実技試験のようなものがあるし、シミュレーションであるし、それから、ロールプレイなどをやってもいいかもしれません。いろいろな形のテストがありますので、そういう形でテストを作って、そのテストが、今、ここに30人いるのであれば、30人全員がこのテストを受けて合格することがわれわれの課題になるわけです。このテストを全員に受けさせて、インチキなしで全員合格させるためには、私はどんなことを、どんな手順で教えればいいのかということが、われわれの課題になるわけです。

このように、テストは彼らを評価するものではなくて、われわれ教員の指針なのです。例えば国家試験に合格するということがゴールであれば、それは外側で客観的に決められるので、どのような授業をすればこの国家試験に合格できるかということを手早く考えられるわけです。そういう態度で、自分の授業であっても、授業枠の範囲内で、テストを作るべきだと思います。そこで、自分がどのような学生を育てたいのかということが明確になると思います。つまり、このテストなりレポート課題がきちんと書けるような学生になってもらうことが私の希望なのだ、願いなのだということを行っているわけです。それは、理念としては常にわれわれは考えているのですが、テストを作ることによって明確化されます。それがゴール分析の意味です。

それからもう一つ、学習者分析があります。これも、いろいろな要因があります。一つの教室に集まってくる学習者、学生はいろいろなタイプの人たちがいるということです。それは、まず学習者の既有知識、これぐらい、全然知らないゼロの人もいれば、30ぐらい知っている人もいれば、50ぐらい知っている人もいます。この段階でまずばらばらですね。それから、学習者の態度も、全然やる気なしで来ている人なのか、すごいやる気があって、いつも席の一番前に陣取ってノートを構えているような人もいます。これもばらばらです。それから、学習者の動機づけです。これも、仕方なく来ているのか、それとも自分で自発的に来ているのかということで、動機づけも随分違います。

それから、学習スタイル、これも違って、視覚型、書いてあるものを見て、よく理解できる学習者もいれば、話をざっとストーリー的に聞いて理解しやすいという聴覚優位の学習者もいます。私は、スライドを見てわかるように、完全に視覚型なので、スライドなしでずっと話されると、ほとんどわからないのです。仕方ないので、ノートを取るのですが、ノートには丸や線を引いて、矢印を書いて、この人はここからこういう話をして、こんな話をしているのだ、と自分でまとめなければ理解できません。そういう人もいれば、逆に、このような視覚、グラフィックを出されると、わけがわからない、きちんと一から順々に話してください、それを聞いて理解できますという、ストーリーで理解するというタイプの聴覚型の学生もいます。ですから、われわれとしてはどうしたらいいかといいますと、聴覚優位で、話をすることが好きな先生はそのままやってもいいですが、例えば補助的にスライドでキーワードを出しておくなどのような形で補助します。それから、視覚型の人、基本的にはスライドを見ながら話すしかありません。私はスライドなしで話せない人なので、すぐにこれを見て話すのですが、その場合も、余り話が飛ばないよう



に注意するなど。ぼんぼん飛ぶことが視覚型の特徴です。そのようにして教員自身のスタイルを優先するのではなくて、いろいろなタイプの人がいるのだということを考えて、補助的にやっていくことがいいと思います。

ということで、最後のワークになります。ニーズ分析、ゴール分析、学習者分析の中で、あなたはどれが一番重要だと思いますかということと、その理由を書いていただきたいと思います。赤のふせんでお願いします。では、2分間ぐらいでお願いします。

(グループワークの時間)

余談ですが、このグループワークのお題には正解がないのです。どれが重要だと思いますかと、これは別にどれでもいいわけです。このようにすると、正解探しという活動が少なくなるというメリットがあります。何を書いてもいいのです。

それでは、2分たちましたので、先ほどと同じようにじゃんけんをして、時計回りに回してください。まず、じゃんけんをお願いします。

(グループワークの時間)

向後先生 どうもありがとうございました。それでは、最後の全体シェアをやりたいと思います。さいころを振ります。6の10。後ろから3番目。お願いします。

K 私は学習分析を選びました。教員と学生が共同作業で教育をするという立場に立てば、例えば運動会の親子リレーのような形で、わが子であれば一緒にすぐ走れるでしょうけれども、他の家庭の子と一緒に足を結んで走るということになれば、やはり、その子が足が悪いかどうか、あるいは運動能力がどうかということをもまずよくわかった上で一緒に走るということを思いました。

向後先生 どうもありがとうございます。

L 私も学習者分析を選びまして、やはり講義にしろ、あるいはゼミにしろ、進めていこうと思うと、つまり、中心である学習者の方々がさまざまです。世代も性別も違うので、私たちおじさんからは「宇宙人」としか言いようがなくて、しかも多様な宇宙人が集まっている中で、少しでも満足していただく教育をしようと思うと、相手がどのような状況かを知ることができるような仕組みか、そういう制度が欲しいと思ったということです。

向後先生 どうもありがとうございます。

M 私も、学習者分析ということになります。薬学部の教員なので、一応ある程度ゴールが見えています。学生のニーズもある程度見えているということですが、そのギャップが大きい学生が何人か含まれているということで、極端な例ですが、私がエベレストに登ることを目指すような学生が時々入ってくるといっ

て、何とかしてあげたいのですが、何ともできないということが大きな、重要な問題だと思いました。

向後先生 ありがとうございます。

N 私は、ゴール分析を選ばせていただきました。私は薬学部の教員なので、国家試験が一つのゴールであるということはわかっているのですが、ただ、各科目、教科科目ごとに見ていくと、どこにゴールを持っていけばいいのかということが非常に難しいということ、あと、時代によってそのゴールも変化しているようにも思えるので、常に、授業をしているときに、どこにゴールを持っていけばいいのかということを考えています。

向後先生 どうもありがとうございました。「宇宙人」ということがとても印象に残りますね。

そうなのです。われわれからしてみれば、学生はほぼ宇宙人です。でも、逆に考えると、彼らからしてみると、教員は完璧に宇宙人なのです。

ということで、どうもありがとうございました。残り10分ぐらい、質疑応答で受けていいですか。

司会（余田所長） はい、どうぞ。

向後先生 10分だけ質疑応答を受けたいと思いますので、もし質問がありましたら、お願いします。

司会（余田先生） 若本先生。マイク。今、行きます。

若本先生 英語英文学科の若本と申します。とても刺激的で、明日から授業でやってみたいと思うアイデアがたくさんあって、大変参考になりました。ありがとうございました。

今日は、ブルームの三つの分類という形でお話をしていただいたのですが、とても有効な、運動技能、認知技能、態度技能という形で、授業を見ていく上ではとても参考になるのですが、向後先生の方で、これだけではできない、この部分でカバーできないと思われるところはないでしょうか。すなわち、この三つで大学の授業を全てカバーして考えることができるとお考えでしょうか。それとも、なければ、このような部分はやはり大学の授業の中ではカバーし切れないということはないかと思うのですが。

向後先生 ブルームの3分類は非常に大ざっぱなもので、その後、もう少し詳しいものが出て、この認知技能のところは少し弱いのです。認知技能は、基本的には知識を獲得することと、理解することと、問題解決なのですが、もう少しメタな認知技能として、どのようにして勉強するかという技能が重要です。それは今日はいっていません。ですから、ぜひ先生方をお願いしたいことは、ただ知識を伝授するというだけではなくて、例えば国家試験に受かるためには、この面倒くさい知識を一応は一通り全部さらっておく必要があるということがあるのではないですか。でも、それをどのようにして要領よく覚えられるのか、要領よく試験に回答できるように勉強できるのかという、勉強の方法を伝授してほしいのです。先生はそれをやってきているはず。だから先生なのです。要領のいい



勉強の仕方、要領のいい本の読み方、知識の獲得の仕方、問題の解き方というのは、皆さんは努力してやってきているはずなのです。だから先生になっているはずですよ。それが嫌いな人は先生にならないのです。



だから、自分は当たり前に行ってきていて、要領よくできるはずですよ。しかし、学生はそのことをまず知らないのです。一方、先生は、もし知っていたとしても、それを明示的に教えることは下品だと思っているのです。私はこのように要領よく勉強してきたということをあからさまに学生に教えることを躊躇する先生が多いと思うのです。それは躊躇しない方がいいと私は思っています。どのように要領よくやるのかということをごんごん教えてほしいのです。そうすれば、覚えなければいけないことはこのように時間を短縮して覚えられますし、その時間短縮した分を他の深い理解に充てられるわけですから。そういうことが学習方略です。

若本先生 どうもありがとうございます。

向後先生 ありがとうございます。

若本先生 ただ、先生、その中で、ストラテジーもとても大事だと思うのですが、一方、論理的思考能力や、例えば英文でエッセイを書かせると、どこまでやっても、言い方は悪いのですが、教え切れないといえますか、限界を感じてしまいます。ある意味では、これは学生の問題ということもあるのですが、そういう、技能として教え切れないものも実際に大学教育には多いのではないのでしょうか。

向後先生 そうですね、そのように思います。大学に限らず、先生が教えられる部分は、全体を10としたら、3ぐらいまでです。残りの7はやはり本人の力でやっていく問題です。でも、そのきっかけを与えるものとして、先ほど言ったような学習方略の教え方や、それから、粘り強くやって、集中してやったりして、自分をコントロールする能力を「非認知的能力」といいますが、そのあたりを授業の中でそれとなく入れておくことが重要かと思えます。だから、先ほどのグループワークにしても、1分間で自分の意見をきちんと言えるという能力が問われているのです。これを余らせてたりオーバーしたりしてはいけないわけですよ。1分間で、適切な分量の情報をお互いに共有できるという能力が試されているので、そういうところから入っていくのです。

若本先生 参考になりました。ありがとうございました。

向後先生 他にありますか。

丸山先生 日本語日本文学科、丸山と申しますが、その先でして、認知技能のイラストを少し説明していただきたいのですが、よろしくをお願いします。



向後先生 これは完全にはしりました。すみません。これはウェイソン課題という4枚カード問題で、心理学の教科書によく出てくるのですが、「表が母音なら、裏は偶数です」という命題が正しいかどうかを、この4枚のうちの最低限どれをひっくり返して確かめればよいですかという問題です。こ

れがウェイソン課題です。イギリスの大学生でやると、30%ぐらいの正解率です。表が母音であるときに裏は偶数であるということを確認するためには、どのカードをひっくり返せばよいかというのがこれです。大体、間違った答えは、Eという母音だから、これをひっくり返さないと、もし奇数が書いてあったらだめだということで、これはわかるのです。その次、偶数なので、4をひっくり返す必要があるのではないかと思うのですね。だから、「Eと4です」と答える人が多いのです。これは正解ではないですね。

もうひとつの問題は、A、B、C、Dの4人の人がいました。日本の法律では、二十歳未満の人はアルコールを飲んではいけません。誰が違反していますか、というものです。誰に問えば違反者を見つけられますかという問題ですね。Aさんは16歳ですと言うから、アルコールを飲んだかどうかを聞く必要がありますね。Bさんは25歳なので、この人は、最初から除外していいですね。聞く必要はないです。Cさんはコーラを飲みました。これもアルコールを飲んでいないので、年齢を聞く必要はないです。除外です。問題はDさんで、ビールを飲んだので、この人は年齢が二十歳未満かどうかを聞く必要があるということで、AとDに聞くことが正解です。これは誰でも解けます。100%の正解率です。

さて、こちらのウェイソン課題ですが、このロジックと全く同じ論理構造をしていて、そうすると、Eと7なのです。7をひっくり返して、もし母音であれば、これは違反しているのです、7をひっくり返す必要があるのです。でも、これを解けないのです。正当率30%です。これが領域固有性ということの証明です。これが、この日常的な領域でわかっているロジックであっても、それを難しく抽象的に言いかえたこのロジックにすると、解けなくなってしまうのです。ですから、われわれは日常的論理の中に生きているのですが、これが専門家の論理になると途端にだめになるという例です。これを領域固有性といったのです。ですから、われわれは普通の人たちを自分の専門領域に引き込むことが仕事なのです。だから、ここにいる人たちを、このロジックで考えさせるのです。だから面倒くさいのです。そういうことがわかっているならば、つまり、われわれが言うところの専門用語は日常的にはこのような概念であるということをきちんと丁寧に対応づけていって、最終的には専門領域で頑張ってくださいということを言いたいのです。その説明です。

丸山先生 ありがとうございます。

向後先生 他にありますか。あと3分ぐらいです。よろしいですか。では、以上で終わりにしたいと思います。お疲れさまでした。



司会（余田所長） 向後先生、どうもお疲れさまでした。それでは、今から閉会の辞ということで、教務部長の飯田先生にお願いします。

飯田教務部長 本日は、向後先生には、お忙しい中、先生の大学の教授会のある日にもかかわらず、本学でお招きしたところ、快くお引き受けいただきまして誠にありがとうございます。今、スライドに出ていますね。『上手な教え方の教科書』（技術評論社）、私も買いました。非常にわかりやすい本です。この本の中に漫画が入っています。いかにわかりやすくするかという

工夫が出ている本です。必要な先生がいらっしゃったら、お貸しします。また、本日は先生方にもたくさんご参加いただきまして、御礼申し上げます。ありがとうございました。

私は、先生のお話を聞いて三つの事を考えました。まず一つ目、先生方のパワーを感じました。もう60代のいいおじさんが「じゃんけん、ぽん」をしていました。ふだんはこのようなことはしないと思いますが、しかも、学長もやっていました。これは、非常に楽しく、しかも、いい研修ができたということではないでしょうか。私と同じグループの中村先生によると、「学生の気持ちがよくわかる」と先ほどおっしゃっていました。これはいかにわれわれが授業をしているときに、学生の心を忘れて、いろいろなことを指示しているのか、ということを示しています。私自身も反省しました。

二つ目です。ゴール分析、ニーズアナリシス、そして何でしたか。

向後先生 学習者分析です。

飯田教務部長 学習者分析ですね。これは、特に先生方によくやってほしいと思うのです。これがシラバスの書き方につながりますので。さて、皆さん、本日のお話のようにきちんと分析してシラバスを書いていらっしゃるでしょうか。という私自身、教務という立場にしながら、今日、改めて、最初にテストを作るということ、授業の目標を明確にするということを、今日改めて気づきました。最初にテストを作るなら、目標が明確になります。ただ、私の場合は目標を非常に高く持ってしまうので、どうも、いつも苦勞してしまいます。本日のお話を聞いて、来年度のシラバスはすばらしいものになるのではないのでしょうか。

最後、三つ目です。お話の中でeラーニングのことにふれていました。実は、昨年度のFD講習会でも、eラーニングのことについてもいろいろと出ていました。私自身も今、実験的に、共通英語の中でeラーニングを使っているのです。その目的は先生の今日のお話とは逆になるのですが、いかに学生に勉強させるかにあります。eラーニングを使って、木曜日と日曜日の夜までに課題を与えておくのです。eラーニングですから、どれだけやったか、何時間かけたか、全部データが出るのです。そうすると、学生の学習時間が増えます。この間、授業アンケートの結果が返ってきて、平均授業外学習時間が1.72時間でした。「3時間以上学習する」学生は25%いました。これはeラーニングをうまく使うことによって学習量を増やすことができるということです。ただし、成果はどうだということはまだ、わかりません。TOEIC等の成

績で検証したいと考えています。つまり、eラーニングは授業外学習をコントロールできるということが一つの特徴ではないかと思っています。

以上3点、先生のお話を聞いて、考えることができました。改めて向後先生に感謝したいと思います。本日はどうもありがとうございました。

司会（余田所長） はい。それでは、先生方、お疲れさまでした。これにてFD講習会を終わらせていただきます。

向後先生 ありがとうございました。

2015年度新任教員入社前オリエンテーション FD ガイダンス開催報告

2015年度新任教員入社前オリエンテーションが2015年3月30日（月）に京田辺キャンパス憩水館104会議室において開催されました。毎年開催されるこのオリエンテーションでは、当センターも同志社女子大学の研究支援体制、研究論理、FD ガイダンスについて説明を行っています。出席者の報告を以下に掲載します。

学芸学部 音楽学科 関谷 弘志

新任教員入社前オリエンテーションに出席しました。

加賀学長による同志社の歴史の概要に始まり、百数十年の時間とともに発展した、素晴らしい同志社の歴史に感銘を受けましたが、そのすべての発端となった、新島襄の渡航の日の心境をしばし考えてしまいました。その偉大なる思いと、きっとその裏側にあったであろう大きな不安を思うと、しばし感慨にふけりました。

続いて中村先生の、「同志社女子大学のキリスト教主義について」のお話へと続きます。私は、その人の教養とは、自分の専門分野以外の世界のことや、違った考え方を広く受け入れることが出来るかどうかだと思っています。お話を伺う中で、キリスト教主義からリベラルアーツへの概念が私の中で関連を持つことが出来、うれしく思いました。

飯田先生のお話による「同志社女子大学の教育について」へと続きます。なかでも「DWCLA 卒業までに身に付けさせたい10の力」には、私自身、身の引き締まる思いでした。また基礎学力、専門知識に加え、それらを活用する社会人としての基礎力を育成する必要性という部分に、現代の教育の多様性を改めて感じます。

山本先生の「研究支援体制、研究倫理についてと FD ガイダンス」へと続き、その膨大な量に、改めて大変手厚く懐深い教員に対する支援体制を実感しました。心強いと感じる反面、期待の大きさ、責任感を痛感した時間でもありました。

斎藤総務部長より、「同志社女子大学の意思決定についてと、リスク管理体制等」のご説明へと続きます。昨今の教育というものの概念の変化を実感し、教育に必要な根本的な姿勢は不変のものであると思いつつも、絶えず時代の流れに目を向けて行く必要性を改めて感じます。

「新任教員入社前オリエンテーション」について述べさせていただきました。大変凝縮し、充実した時間でした。

学芸学部 情報メディア学科 松谷 容作

新任教員入社前オリエンテーションでは、本学の教育理念と教育・研究のあり方を再度確認し、また教育における現在の問題と取り組みについて説明がなされた。さらに、問題と取り組みについてより理解を深めるために、本学の教育実践の状況についてレクチャーを受けた。そのレクチャーでは、形態（講義、実験、実習など）や内容（概論、応用など）、登録人数や学年の異なる授業を複数例にあげ、それらと各授業の学生アンケート結果との関係について多面的な比較検討が行われた。その比較をつうじて、目下の課題のひとつであるアクティブ・ラーニングが、学生の学びの向上にとって効果的であることが確認された。またアクティブ・ラーニングの実現が困難な授業科目において、どのような創意工夫が可能なのか、そのことについての意見交換がなされた。さらに、eラーニングの導入や成績評価の徹底した客観性の確

保などについても、細やかなレクチャーがあった。以上の新任教員入社前オリエンテーションをつうじて、報告者は、本学での教育についての理解を深めることができた。報告者は、オリエンテーションで提示された多様な教育実践を自身の教育活動に積極的に取り込んでいく予定である。

現代社会学部 社会システム学科 **大倉 真人**

第一に、学長のお話から、同志社および同志社女子大学の建学の精神・教育理念等を学びました。特に、同志社女子大学が、「キリスト教主義」「国際主義」「リベラル・アーツ」という3つの大きな柱を教育理念としている点を学習いたしました。

第二に、宗教部長のお話から、同志社女子大学におけるキリスト教主義教育について学びました。その中で、同志社では、科目名が「キリスト教学」などではなく、「聖書」という名称となっていること、およびその名称に込められている性格・理念等について学習いたしました。

第三に、教務部長からのお話は、同志社女子大学における教育の特徴を説明するとともに、実際に行う授業に関連する制度についての内容でした。2015年度春学期より授業を行います。このお話を聞いたことで、自分が実際に授業を実施する際の要点等を知ることができました。

第四に、教育・研究推進センター所長からのお話は、授業評価やDWCLA 10といった、より良い授業を実施するためには欠かせないポイントに焦点をあてたものであり、今後実際に同志社女子大学で授業を行っていく上で非常に参考となるお話でした。

第五に、総務部長より、「同志社女子大学」の組織等についての説明がありました。具体的には同志社女子大学全体の機構やハラスメント防止体制等について学びました。

現代社会学部 社会システム学科 **Lisa Rogers**

In spite of being entirely new to the Faculty of Contemporary Social Sciences, I felt comforted by the early orientation informing me of what to expect as I began working at Doshisha Women's College of Liberal Arts. I learned many things that I didn't know about the philosophy of the university as well as its goals and expectations. I would like to incorporate them into the work I do in the future.

現代社会学部 社会システム学科 **畠山 啓**

3月30日に実施された新任教員入社前オリエンテーションに参加させていただきました。オリエンテーションでは授業アンケートやFD関係講習会などの本学FD推進事業、学内外研究資金の種類や申請などの研究支援体制や、研究倫理に関する詳細な説明があった。当日の配布資料の中で、FDとは「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組み」のこととあり、このオリエンテーションで教育面でも継続的に改善活動に取り組むことが重要であることを改めて認識しました。今後は同志社女子大学の様々な研究支援体制、講習会を積極的に活用して、授業内容・方法の継続的改善に取り組みたいです。

現代社会学部 社会システム学科 尾玉 剛士

はじめに、学長から同志社創設の歴史、新島襄の教育思想および現在の同志社女子大学の取り組みや教育理念についてご説明があった。続いて、宗教部長からは会衆主義教会の考え方や本学のキリスト教主義教育の実際について詳しく解説していただいた。教務部長は本学の教育理念に加えて「Passive learning から Active learning へ」、「履修主義から習得主義へ」といった大学教育のあり方の変化や、授業外学習の重要性、卒業までに学生に身につけさせたい10の力 (DWCLA 10) などについてお話しされた。また、授業や成績評価に関する具体的な手続きのご説明もあった。その後、教育・研究推進センター所長による2013年度授業アンケートの分析結果の紹介に続けて、本学の研究支援体制や研究倫理に関するご説明があった。最後に、総務部長から本学の意思決定の仕組みやリスク管理体制などについて解説していただいた。

全体として、本学での教育に携わる上での基本的な心構えや、授業・研究に関してとるべき手続き、本学の組織などについて多くの情報を得ることができ、充実した時間を過ごすことができた。

現代社会学部 社会システム学科 Calum Adamson

We had an orientation in which a great deal of useful information was given about the university. We had the opportunity to become familiar with our new surroundings and heard several talks on aspects of university life, research and administrative duties. It was also a valuable opportunity to introduce ourselves to new and established staff at Doshisha Women's College of Liberal Arts.

私のマナビー活用法

教育・研究推進センター所長 余田 義彦

本学に授業支援システム「マナビー」が導入されて半年が経ちました。このシステムは manaba という製品名ですが、導入校ごとに愛称をつけることになっています。そこで、本学では大学キャラクター VIVI と掛け合わせてマナビーと呼ぶことにしました。

パソコンやスマホを使ってマナビーにアクセスすると、教員の場合は担当科目の一覧、学生の場合は受講科目の一覧が最初に表示されます。そこで科目を選ぶと、コースニュース、小テスト、アンケート、レポート、プロジェクト、成績、掲示板、コースコンテンツなどの機能が利用できるようになっています。これらは特定の授業形態や学習指導法での利用だけを想定した機能でないので、工夫次第で様々な役立て方ができます。

昨年12月と今年1月に開催されたアクティブラーニング講習会では、日本語日本文学科の森山由紀子先生、社会システム学科の記虎優子先生、医療薬学科の木津良一先生にそれぞれの活用法をご紹介いただきました。私も3名の先生方とはまた違った方法で活用していますので、その概要を紹介したいと思います。あわせて参考にいただければ幸いです。

1. 授業のプラットフォームとして利用する

マナビーにはコースコンテンツという手軽にホームページを作成できる機能があります。この機能を使って授業用ページを作成し、それをプラットフォーム（土台となる環境）として授業を行ってきました。

情報メディア学科では、学生にノートパソコンを貸与しているのでそれを使って授業を受けさせることができます。そこで、私も受講生も授業用ページを開いて、その内容を参照しながら授業を進めることにしました。授業ではパワーポイントを使いますし、プリントを配布して演習や実習をさせたりもします。それらの内容も pdf 化して授業用ページに載せておき、受講生が後で利用できるようにしています。

授業用ページを使って授業を行うことには、以下のようなメリットがあります。

- ①授業で使用する教材や資料を一元管理できる。
- ②テキストや画像に加え、動画やファイル、プログラム、web ページへのリンクなどの学習リソースも配信できる。
- ③情報を随時更新できる。
- ④受講生の閲覧状況を確認できる。
- ⑤欠席者のために授業資料を取り置く必要がない。

授業用ページの構成ですが、講義科目の場合は取り上げる内容が毎回変わるので、各回ごとに授業ページを用意します。たとえば、「情報ネットワーク」では、次のようなコンテンツを用意しました。(図1)

【授業】各回の授業ページ（前回の宿題へのフィードバック、授業内容のアウトライン、参考動画、参考サイトへのリンク、演習や実習の資料、次の宿題、配布資料などを掲載）

【今日の授業について一言に対するコメント】各回の授業の振り返りから選んだ学習に役立つ一言とそれに対する教員コメント

【学習リソース】配布プログラム、リンク集、設定方法・操作方法など

【学習リソース [動画]】授業内容に関する動画

【授業と学習の進め方】シラバスの補足、上手なノートの取り方など

一方、ゼミや演習科目の場合は何回かで一つのテーマを掘り下げて行くことが多いので、テーマごとに授業ページを用意します。たとえば、「卒業・演習制作」では、次のようなコンテンツを用意しました。

【卒論・ポートフォリオ】提出までの流れ、卒論の書き方（書式とテンプレート、本文の書き方、図表の書き方、文献の参照・引用方法）、ポートフォリオの作成方法など

【発表】発表会スケジュール、プレゼン技法、レジュメの作成

【学習リソース】配布プログラム・リンク集、研究方法など

【この科目について】シラバスの補足

【記録2015】ゼミや合宿の記録写真など

2. 授業に動画を活かす

マナビで気に入っていることの一つに、簡単に動画を配信できることがあります。動画再生はマナビを使わなくてもできますが、授業ページに動画を埋め込めるので解説を加えておくことができます。また、授業ページ上で一元管理できるので、授業中に動画を探して開く手間がらず迅速に再生できます。さらに、手持ちの動画に加え、YouTube 動画にも対応しているので、無数と言える動画から用途にあったものを探して教材化できます。たとえば、「情報ネットワーク」の授業では、以下のような用途で動画を活用しました。

■社会との繋がりを意識させる

授業の初回では、スペインの携帯電話事業会社のCMを視聴させてネットワークの社会的意義について考えさせました。また、4回生の内定先企業（ネットワークインテグレータ）の女性向け新卒採用動画を視聴させて、当該科目での学びが将来の進路とどのように繋がるか見通しを持たせました。

■解説にリアリティを付与する

授業では、家庭のパソコンをインターネット接続する方法について解説します。しかし、パワーポイントを使った説明だけでは、実感を伴った理解に至りません。そこで、新居に光ファイバー回線を引いてインターネット接続の様子をレポートした動画を視聴させて、その実際を理解させました。

授業では、クラウドサービスについても触れます。受講生にとっても身近になってきたクラウドサービスですが、それがどのような施設や人々によって提供されているかまではリアリティをもって理解できていません。そこで、グーグルが公開しているデータセンターの動画を視聴させて、その具体的なイメージを持たせました。

■実験ビデオやマニュアルビデオを活かす

YouTubeには様々な実験ビデオやマニュアルビデオが公開されており、それらも教材として利用できます。宿題の振り返りでシールドについて学生から質問があったので、「電子レンジのマイクロ波の遮蔽実験」という動画を視聴させて、LANケーブルにはシールド付きとそうでないものがあることを解説しました。また、光ファイバーを使った通信について解説したときには、「光ファイバーを使って光通信を調べてみよう！」という動画を視聴させて、光で情報が伝わる様子を観察させました。

授業ではLANケーブルの製作実習も行います。規格について説明した後、「LANケーブルの製作ビデオ」と「LANケーブルのテスト」動画を視聴させて工程全体について見通しを持たせました。その後でケーブル製作の勘どころを説明して、製作実習をさせました。

3. 授業時間外学習を充実させる

教室で行う対面教育と授業時間外に行うオンライン学習を組み合わせた授業のことを「ブレンド型授業」と言います。その実践例を以下で3つ紹介します。最初のは情報文化専攻の「メディアリテラシー特論」、後の二つは「情報ネットワーク」での取り組みです。

■ビデオを事前視聴させてディスカッションを深める

受講生にビデオ映像を視聴させ、その内容についてディスカッションを通して分析させます。多角的に分析させるには、映像をしっかり視聴させておく必要があります。しかし、視聴に時間をかけてしまうと、

ディスカッションに使える時間が減るというジレンマがありました。

そこで、コンテンツにビデオ映像を貼り付けておき、授業時間外の都合のよい時間に視聴させることにしました。そして、各自に視聴した動画から授業で取り上げたいものを一つ選ばせて、掲示板にそのタイトルと選んだ理由、話し合いたい論点などを投稿させました。その結果、授業では特に関心をもっているビデオ映像だけに絞って再視聴し、十分な時間をかけて内容について議論して分析することができました。

DVD 配布でも同じことができますが、この方式であればDVDを受講生の数だけ用意する必要がありません。また、受講生はパソコンを持っているので動画閲覧の方が容易にできます。マネージャーはファイルのアップロードに50MBという容量制限がありますが、圧縮形式にflvを使えば10分近い動画まで掲載できます。

■パフォーマンスアセスメントに活かす

パフォーマンスアセスメントとは、実際にやってみさせて評価する方法です。IPアドレスの計算では2進数、10進数、16進数での相互変換が必要になります。この計算は基数変換で行うのが一般的ですが、授業ではより便利な方法として指を使って2進法と16進法で数える計算法を教えます。

授業中に受講生と一緒に何度かこの方法で数えてみて、後は宿題としてデモ動画を見て練習させます。昨年度までは翌週の授業中に一人ずつ順に数えさせて評価していました。しかし時間がかかり過ぎたので今年度は、数えている様子を動画で撮影させてそれを掲示板の投稿に添付して報告させました(図2)。

スマホで動画を撮影すると、画像サイズが大きくなります。OSやブラウザ、圧縮形式によって、表示できない動画もあります。そこで、「Online Video Converter」というサイトを使って、適当なサイズ、圧縮形式に動画を変換した上で報告させるようにしました。

■シミュレーションプログラムを使って実習をさせる

初歩的なネットワークを構築する課題を与えて、PacketTracerというシミュレーションプログラムを使ってそれに取り組みせました。授業中に半分ほど課題を完成させ、残り半分の完成を宿題として課しました。そして、成果物のファイルと振り返りのコメントを掲示板に投稿させました。

4. 掲示板を使って相互啓発による学びを促す

大学の授業では、知識・技能の習得に加え、問い方や考え方を身につけさせることが重要です。後者については、教員からの働きかけだけでなく、他の受講生から学ぶことも多いので、マネージャーを活用してそのような機会を増やしたいと考えています。

「情報ネットワーク」の授業では、毎回の授業の最後に掲示板を使って振り返りのコメントを投稿させています。アンケートでなく掲示板を使う理由は、コメントが他の受講者の目にも触れやすいからです。スレッドの最初の投稿には「他の人の学習に役立つコメント等については加点します。」というメッセージを添えて、授業中に抱いた疑問や考えの投稿を奨励しています。クラス全体でシェアする価値がある投稿についてはコメントを書き、それだけを転載したページを「今日の授業について一言に対するコメント」というコンテンツに載せています。そして、毎回の授業の始めにその内容をレビューします。

宿題を提出する際にも振り返りのコメントを書かせており、授業の振り返りと同じようにクラス全体でシェアする価値のあるコメントについては授業の始めで紹介するようにしています。(図1)

おわりに

コースコンテンツと掲示板の活用を中心に、私のマネージャーの活用法を紹介しました。コースコンテンツを使って教材や資料を一元管理して行くことは、授業の見える化を促して、授業改善のPDSサイクルを作っていく上でも役立つと考えています。また、掲示板への投稿をクラス内でシェアしていくことは、相互啓発による学びの環境を作り上げていく上で有効であろうと考えています。

能動的で主体的で協働的な学びとしてアクティブ・ラーニングが重視されるようになっていきます。その

ような授業では体験を通した学びが強調されますが、それを「ごっこ遊び」で終わらせず、高等教育にふさわしい「深い学び」へと変えていくには思考を言語化させる活動が重要になると考えています。次年度以降は、マナビーをそのような活動の充実に役立てて行きたいと考えています。

授業
更新日時: 2016-02-07 15:08

第10回

次週の授業終了後にノートを確認しますので、その準備をしておいてください。

前回の宿題(PacketTracer実習3)の振り返りについて

pingコマンドでPC0とPC3の接続を確認したところ何回もタイムアウトになってしまい、もう一度確認したところ正常に接続できました。1回目では送信側から受信側までの経路がわからなかったのでしょうか。()

たいへん迅速にご返信くださいました。ありがとうございます。そのため、ワンタイムで済ませたいので、タイムアウトはごめんです。シミュレーションプログラムであるパケットトレーサーは、現実のネットワーク環境でpingしても一度目はタイムアウトが当たり前です。

IPアドレス、デフォルトゲートウェイを設定したのですが、接続性が確認できませんでした。どこが間違っているのかわかりません。

PC0からPC1への接続性を確認してみる

```
PC>ping 192.168.0.3
Reply from 192.168.0.3: bytes=32 time=1ms TTL=128
Reply from 192.168.0.3: bytes=32 time=0ms TTL=128
Reply from 192.168.0.3: bytes=32 time=0ms TTL=128
Reply from 192.168.0.3: bytes=32 time=0ms TTL=128
***成功しています。
```

PC0からデフォルトゲートウェイへの接続性を確認してみる

```
PC>ping 192.168.0.1
Request timed out.
Request timed out.
Request timed out.
Request timed out.
***つづがっています。
```

原因の特定...スイッチとルータが正常に接続されているか？

詳細アナログの11日目のスライドを参照してください。

PC0 PC1間のネットワーク(192.168.0.0/24)のFastEthernet0/0ポートと接続されている必要があります。(1)は配置ファイルのルートはFastEthernet0/0ポートにIPアドレス192.168.0.1/24ポートにIPアドレス192.168.1.1/24が割り振られているため) そのようになっていますか？

解決策

LANケーブルを差し替えて、もう一度テストして再確認してください。

今日の授業

授業内容

- 3Bローカルネットワークの計画と接続
- 4.1 インターネットとインターネットへの接続方法
- オフラインによるインターネット接続 https://manavi.dwc.doshisha.ac.jp/1/page_31824c23253_3f50097370
- 昔の技術でのインターネット接続 https://manavi.dwc.doshisha.ac.jp/1/page_31824c23253_2952791654

宿題

- 情報システム課の下部へ https://manavi.dwc.doshisha.ac.jp/1/page_29079a23253_805307513

配信資料

- 第10回.pdf - 2015-12-09 01:54:52

ふりかえり

- 今日の授業について一言

図1 「情報ネットワーク」の授業ページ

授業
更新日時: 2016-01-12 16:27

フィンガーカウント

宿題

動画と同じコードで確認して10進数から16進数への変換方法を覚えてください。そして、その過程を動画で確認し、本ページのコメント欄で感想をコメントしてください。

※証明画像の動画ファイル(MOV, FLV, MOV, MP4)などはコメントの添付ファイルとしてお持ちください。

動画を観て10進数を数えてみる(新しいタブで開く)

4. 6. AとBの値の総和を算出して、そこから差を求めればよいので10進数と16進数の相互変換をマスターしてください。

Binary Finger Counting

2016-01-12 17:08 - 8分 - 8回 (編集) (削除) (詳細設定)

このページに書き込まれたコメントは、匿名からも確認できます。すべてのコメントをみたい場合は、「表示数で表示」をクリックしてください。

コメントで表示(2件)

再度アップしました。9分以内の視聴もまだその10分以内です。もっと早くできるように頑張ります。

2016-01-11

PC0からAへの接続性が確認できました。確認をお願いします。

図2 フィンガーカウント (パフォーマンスアセスメント)

本学 FD 推進事業について◆

学芸学部教育取り組みについて

教育・研究推進センター主任 松下 悦子

学芸学部を構成する音楽学科・情報メディア学科・国際教養学科の3学科は、2014年度より、それぞれの学科の教育についての取り組みの事例を紹介し、互いに理解を深めることを目的とする「FD研究会」を開催している。

「第1回FD研究会」は、2015年3月12日に京田辺キャンパス C232教室に於いて実施された。今回は3学科全ての取り組みを、授業ビデオやパワーポイント資料を用いて紹介された。日頃、同じ学部内にあり、各学科の専門性はなんとなく知りつつも、その授業内容や具体的な試みなどを知る機会は少ない。そのため、今回の研究会において紹介された各学科の取り組みは大変興味深く、刺激されることも多かった。今後、学芸学部として3学科が協力し、新しい教育の取り組みを考えるためにも、大きな「はじめの一歩」となった。

以下、「第1回FD研究会」の内容を紹介しておく。

* 音楽学科

「音楽学科におけるオペラ制作の過程について」

井上 敏典 先生

演奏専攻声楽コース4年次生の選択科目「オペラ」の履修生が出演する公演「フィガロの結婚」は、男声共演者を含め、100名を超えるスタッフに支えられている。特に、オペラ公演には欠かせない裏方仕事(舞台監督、照明、衣装、大道具、小道具、広報、公演運営など)は、その仕事のプロの担当者を中心に、3年次生以下の学生のボランティアによって分担され任されている。通常、このような裏方仕事は、プロの裏方担当者のみが行うものであり、本学のように、学生がプロの担当者からその仕事内容や方法を学び、一緒に仕事をするは大変稀なことである。

今回、井上先生は裏方から見たオペラ制作の取り組みをビデオで紹介した。プロの担当者から教わった様々な技術を身につけ、自覚と責任をもって仕事をこなしている学生たちの生き生きとした表情は、とても印象的であった。

オペラ公演というと、出演者ばかりが目立ちがちであるが、様々な裏方の仕事を体験した学生たちにとって、その制作過程にオペラ制作の醍醐味があり、公演を支える喜びを体験できた貴重な機会となったことであろう。今後の演奏活動にこの経験を活かしてほしいと願う。

* 情報メディア学科

「情報メディア学科における講義室以外のFD活動の取り組み

～展覧会、講演会、ワークショップ開催について」

三根 浩 先生

(発表資料作成：二瓶 晃先生)

情報メディア学科では、学科開設時(2002年)より、アート・デザインに対する理解と興味を深めるために実施される「展覧会」、情報とメディアを考えるための多様な視点や知識を学ぶ「講演会」、そして、メディア技術を扱うための専門的な技術を習得する「ワークショップ」などを多く開催してきた。

これは、学生たちに、通常の講義や演習では得られない体験の場を提供し、「現場」の視点からの指導を受ける機会を与えるという、学科における教育・研究を補完するものとして位置付けられ、その運営は、

メディアサポートセンターが主として担当し、教員と学生をサポートしている。

2014年までの主な事例として、河内倫子氏（写真家）の作品展示『光と影 Light and Shadow』、松井博氏（作家、経営者）の講演会『シリコンバレーからみた ICT の未来』、武村敏弘氏（ムービーカメラマン、情報メディア学科属託講師）のワークショップ『プロの現場に学ぶ CM・ドラマの撮影テクニック』、吉尾一氏（イラストレーター）『LINE スタンプをつくろう イラストレーションワークショップ』などがある。

またその他に、現在、活躍している卒業生による講演会や、研究発表の場としての学生公募展なども毎年実施されるなど、学生たちを発奮させる取り組みが企画されている。

* 国際教養学科

「国際教養学科の留学事前指導とその周辺」

鈴木 健司 先生

国際教養学科では、英語圏の大学への留学を必修として、カリキュラムに組み込まれていることはよく知られていることである。その留学を滞りなく実施するための科目として「留学事前指導 / Oversea Studies Preparation」が3学期にわたって設置されている。その内容は、TOEFL 受験や安全教育、各種申請手続きなどの事務的な説明など、実務的な留学準備を多く含んだものとなっている。

また、これらの科目に加えて、留学を終えた3、4年次生のボランティアによって、下年次生に自身の留学経験に関するプレゼンテーションを行う機会や、対話や懇談の機会をもち、下年次生が将来の留学生活をより具体的にイメージできるようにサポートもしている。こうして、学年を超えて親身に教えてもらう緊密な人間関係を築いた学生たちは、留学終了後は教える側へと役割を転じていく。

このような説明会等での上級生と下級生の交流は、留学前は留学することの意識を高め、留学後は自分の体験を他者の将来に生かすことができる喜びを知り、「教える」経験を得る場ともなっている。

特筆すべきことは、同志社女子大生として、また同志社人としての自覚をもって、留学先での異文化交流を深めてほしいという強い願いから、「新島襄と留学-同志社を知る-」という講義やフィールドワーク、そして同志社大学今出川キャンパスツアーにも参加し、同志社人としての自覚を新たにしていることである。

今後ますます変化していく国際情勢の中、多岐にわたって検討すべき課題も増えることと考えられるが、この留学が、個々の学生のこれからの人生において、豊かな実りをもたらす経験となるよう、尚一層充実した留学事前指導となるよう、国際教養学科は今後も検討し続けている。

現代社会学部教育取り組みについて

教育・研究推進センター主任 大津 正和

現在、現代社会学部社会システム学科では、基礎教育科目として「基礎演習」（2単位）のみが必修科目と位置づけられているが、これは春学期のみで終わってしまうため、1年生秋学期には学科として新入学生全員の指導を行う機会がない。初年次教育として、高校までから大学への接続をスムーズに行い、学生たちが大学での学びへと成長していくことをサポートするためには、現状はやや不足する状況といわざるを得ない。この点を改善するために、社会システム学科では、2017年度スタートの新カリキュラムで1年生向けの基礎教育科目を充実させる計画を進めている。今回は、この計画を紹介する。

まず、講義形式の内容と従来の基礎演習とを組み合わせ、「大学生活の学びのデザイン I（仮題）」（春学期2単位）と「大学生活の学びのデザイン II（仮題）」（秋学期2単位）に拡充する。この変更によって、

高校までから大学へという学びの環境の大きな変化に直面している1年生に、1年間継続して初年次教育をきめ細かく実施することが可能となる。

内容的には、講義形式の授業によって、社会システム学科という学習対象が非常に広い学科特徴への理解を深めさせ、2年生以降の専門教育・研究に向けた準備を促すことを目指す。そのために、講義形式の授業では、各コースの教員がそれぞれのコースの教育・研究の対象やその特徴について紹介するとともに、上級生をティーチング・アシスタント（実際の運用形態については検討中）として参加させる。すなわち、アクティブ・ラーニング的要素を組み込むことで、提示される内容を1年生が理解しやすい状態を確保することをつとめるとともに、ティーチング・アシスタントとして履修する上級生にも社会システム学科での教育・研究についての理解を深める機会を提供することを目指す。

そして、演習を講義と組み合わせる（何回か演習を行い、何回か講義を行うという組み合わせ）ことによって、少人数教育のメリットである一人ひとりに目が行き届く対応や講義での学びへのフォローといった対応を行うことで、講義で紹介された内容を個々の学生に合わせた理解を進める。講義形式の授業でのアクティブ・ラーニングは、少人数のグループ単位で進行させるが、このグループと演習クラスとは分離することによって、より多角的な理解を進めることを促進する。

これらの改善を行うことで、1年生時点から、現代社会の中の多様なシステムを多様な視点から取り上げ考察するという社会システム学科での専門教育・研究へと進んでいく意識・姿勢を要請することで、学科全体としての教育成果を向上させることに繋がると期待される。

薬学部教育取り組みについて

—薬学教育におけるルーブリック法を用いた成績評価の導入に向けて—

教育・研究推進センター主任 松元 加奈

昨年度の薬学第三者評価で「改善すべき事項」として、

- 1) 「ヒューマニズム・医療倫理教育」、「コミュニケーション能力・自己表現能力を修得する教育」に含まれる科目について、目標達成度を評価するための指標を設定し、それに基づいて評価を行うことが必要。
- 2) 問題解決能力の醸成を目指す科目について、それぞれの目標に対する到達度の明確な指標を立て、それに基づいて評価を行う体制を整えることが必要。

との指摘を受けたのを機に、薬学部では成績評価に「ルーブリック法」の導入を模索してきた。

さらに、薬学第三者評価での「助言事項」として、「薬学部独自のFD活動に早急に取り組むことが望ましい」との指摘があり、これを受けて昨年9月に第1回薬学部FD講習会を開催した。講師として摂南大学薬学部准教授の安原 智久先生を招聘し、「ルーブリック法による成績評価」と題した講演を薬学部教員30名が拝聴した。

講習会ではまず、「パフォーマンス評価とルーブリック」という内容が示された。すなわち、新しい6年制薬学教育モデル・コアカリキュラムが目指す学習成果基盤型



教育 (outcome-based education) は、卒業時に修得済みであることが期待される事柄、つまりエンドポイントをまず定義し、そのエンドポイントに到達しうる教育を責任もって提供するものであり、ここでの修得は単に知識を得ることだけでなく、実際に学習したことを遂行 (パフォーマンス) する能力を有している必要があることが説明された。その際、興味深かったのは、“パフォーマンス”の説明として、『助走をしてハードルを適切に飛び越す』という比喩を示されたことである。すなわち、仮に「歩幅とハードルの間隔を説明できる」、「理想のフォームを説明できる」、「垂直に50cm 飛べる」、「水平に100cm 飛べる」「安定した着地できる」と分割して評価をし、これらが出来たとしても、実際にハードルを飛べるわけではないが、従来の評価法はこの分割項目の評価のみに留まっており、これを見直す必要があるとのことで、これからはパフォーマンスそのものの評価が重要で、それに向けてルーブリック法に基づく評価法が適している点を強調されていた。

続いて、グループワークとして「ルーブリックの作成」に取り組んだ。本学薬学部のディプロマポリシーである『薬の専門家として医療社会に貢献するため、生涯にわたる積極的な自己研鑽によってその知識と技能を高め続ける態度を身につけている』から、学生が到達すべきアウトカムを設定し、評価用ルーブリックを作成するという課題が与えられた。4グループにわかれ、それぞれのルーブリックを作成し、発表およびフィードバックが行われた。

最後は、摂南大学でのルーブリック作成例に関する講演が行われた。

薬学部では、今回の講習会をもとに、まず「薬学研究」においてルーブリック評価の導入を検討している。

看護学部教育取り組みについて

教育・研究推進センター主任 片山 由加里

看護学部看護学科は開設初年度である。様々な経験を持つ教員が一堂に会してのスタートであり、新人教員の割合も多い。教員が学部の理念やカリキュラムに対する共通理解のもとに教育に取り組めるようにFD活動を行った。その中から以下の4点を紹介する。

1. オープンクラス (授業公開)

1年次春学期の「看護理論」、「ヘルスアセスメント」、「看護学概論」をオープンクラスとした。これらの科目は、看護学の基盤となる科目であると共に、基礎看護学実習のレディネスを高める科目である。学生の意欲・関心、学習状況を教員が共有できるように活用された。

2. 看護学実習準備プロジェクト

「基礎看護学実習Ⅰ」(1年次春学期必修、集中1単位45時間)に向けて、教員全員で取り組んだ。実習指導教員の約半数が新人教員であったことから、実習指導力の向上をねらいとした。5か所の実習施設の協力を得て教員が病棟研修を行うなど、以下①～⑤の内容を実施した。実習指導において、各実習施設の看護管理者および指導者からも一定の評価を受けた。

- ① 「大学で看護学を教育すること」に関する講義とグループワーク
- ② 実習施設での研修 (研修計画案の作成、1～3日間の研修)
- ③ 「学生が実習で遭遇しやすい困難場面での指導」に関するシミュレーション
- ④ 実習指導案の作成
- ⑤ 実習記録の指導に関する方法

3. 看護 OSCE (Objective Structured Clinical Examination: 客観的臨床能力評価) 勉強会

看護実践力の育成を目的とした看護 OSCE の実施に向けて勉強会を開催した。看護 OSCE を実施する

意義を教員間で共有し、実施に向けた具体的な方法について検討した。

4. リサーチセミナー

各教員の研究活動を相互に理解するために、月に1回開催した。教員3名が話題提供者となり、研究テーマにそったプレゼンテーションを行い、質疑応答を行った。

表象文化学部教育取り組みについて

教育・研究推進センター主任 生井 知子

昨年度は、英語英文学科（以下、英文と表記）のShakespeare Production を取り上げたので、今回は日本語日本文学科（以下、日学と表記）の宮沢賢治プロジェクトについて御報告したいと思う。

宮沢賢治プロジェクトは、「英文のように、日学の学生達も舞台を作りたい」という念願をかなえようと、2013年12月に当時の4年生が中心となって発案、2014年3月13日に栄光館で第1回目の公演を実現したことに始まる。

引き続いて2015年3月6日には第2回目の公演を実施し、2016年3月3日には第3回目の公演を予定している。宮沢賢治の作品を、演劇や朗読などの形で立体化し、観客に味わって貰うという試みである。宮沢賢治を選んだのに深い理由はなく、誰でも知っている作家であること、短い作品が多いことなどによる。

このように述べると英文のShakespeare Production が60有余年の歴史を抱えているのに対し、宮沢賢治プロジェクトは突然の思い付きで始まったもののように見える。が、実は、それなりの前史がある。

演劇を取り上げていくことは日学のカリキュラムにとっても重要なのだが、演劇そのものを指導できるような専任教員は、日学の中にはいなかった。そこで最初に行なったのが、同志社女子大学演劇部およびOGの協力による、2002年6月および2005年1月の「演劇ワークショップ」だった。

これらは、学生の参加しやすい水曜午後に3時間だけ時間をとり、発声練習・柔軟体操、演劇についての解説や、台本読みあわせ、舞台稽古から上演までを、一通りミニ体験するというものであった。

その結果、「もっとやってみたい」という声が多く出、2005年度の集中講義に演劇を取り上げることとなり、石本興司氏を講師として御願いすることとなった。それ以来、授業や自主企画として石本興司氏による「身体表現ワークショップ」が受け継がれ、2009年に表象文化学部が出来てからは、「身体表現Ⅰ・Ⅱ」という形で集中講義が継続的に行なわれるようになった。その中で、納得の行くまで表現を練って、それを観客にも見て貰いたいという声が高まってきたのである。

何事も、ただ「やればばいいね」でとどまっている限り、それは無意味なおしゃべりに過ぎない。そこで、とりあえずやってみよう、やりながらどんな問題点があるか、どんなことが可能かを考えてみようというスタンスではじまったのが、このプロジェクトである。

メリットとしては、授業ではないので型にはまらず自分たちのアイディアで出来るし、無理になればやめられるということがある。しかし、その反面、恒常的な予算がない（第1回目は、日本語日本文学会の学生企画として立ち上げたので、予算総額3万円。石本興司氏にはボランティアで全面的にご指導頂いた）、参加者の日程が合わせにくいというデメリットがある。

こういうイベントは、皆で協力して何かを成し遂げるという訓練にもなり、揉め事も含めて実践的な勉強のチャンスになる。しかし参加者の価値観も熱意もバラバラで、それをまとめていくのは並大抵のことではなく、そこに教員がどの程度関わるべきかも難しい。

また肝心の演劇が、たいしたレベルにはならないというのも大きな問題だ。何しろ、秋学期の期末試験が終わってから本格的な練習を始めるので、稽古時間が完全に不足している。かといって秋学期の授業中は参加者のスケジュールをあわせることはほぼ無理だ。

第2回の企画中に、このまま学生に任せて公開を前提としたイベントを続けていくことは無謀だ、そもそも演劇の表現とはどういうものなのか、きちんとした教育から始めなくてはならないということが見えてきたので、2015年度は教育基金で4日間にわたる「演劇ワークショップ」を企画した。ただしこれは単年度のものなので、今後どうするかは展望は立っていない。

また、昨年度 Shakespeare Production を取り上げた際にも書いたことだが、栄光館は、演劇には不向きなのだ。英文には Shakespeare Production の他にも色々演劇の授業があるし、日学でも体験型授業をしているのだが、今出川にはそれにふさわしい場所がない。頌美館ホールがなくなったダメージは大きい。シンプルだけれど使い勝手のよい小ホール、演劇にも使えるような教室が是非必要なのだ。

教育改革は簡単には出来ない。新しいことをしようと思うと大変だ。個人の努力ではどうしようもないこともある。模索しながら、それでも一步一步進むしかないのだろう。



宮沢賢治の童話を創作狂言にして英文の Medlock 先生にご指導頂いた。

こうしたところから、新しい表象文化学部の可能性が開けるかも知れない。

生活科学部教育取り組みについて

— 生活科学部におけるキャリア支援教育としての「インターンシップII」 —

教育・研究推進センター主任 山田 恭正

生活科学部ではキャリア支援教育を推進することを目標にして、人間生活学科と食物栄養科学科食物科学専攻で、「インターンシップII」を応用各論科目（3年次）として単位認定可能な科目に設定し、実施している。本学キャリアサポートセンターが実施している「インターンシップI」という科目もあるが、こちらは学生の応募規定が2年次以上で実習先は幅広く、必ずしも学生の専攻分野と関連があるとは限らない。しかし、「インターンシップII」の実習先は学生の専攻と関係が深い分野に特化していることが特色である。履修内容は事前指導、実地で実習（原則、夏期休暇中に2週間相当）、事後指導から構成されている。各学科の授業テーマと実習先は次の通りである。

[人間生活学科]

- A. 地域子育て支援の体験実習；(社福法人) 曙福祉会あけぼの保育園
- B. 商品開発につながる研究業務体験；パナソニック（株）エコソリューションズ社ライティング事業グループ
- C. 模型製作・ディスプレイデザイン会社における製作業務体験；(株) さんけい

[食物栄養科学科食物科学専攻]

- A. 商品開発につながる研究業務体験；江崎グリコ（株）健康科学研究所
- B. 麺製造会社における新商品開発体験；（株）三輪そうめん山本 麺ゆう館
- C. クッキングスクール運営業務体験；ラ・キャリエールクッキングスクール
- D. 食品会社における商品開発業務体験；（株）フードリエ
- E. 酒造会社における品質管理・商品開発業務体験；梅乃宿酒造（株）
- F. 総合酒類食品企業における研究開発業務体験；サントリーグローバルイノベーションセンター（株）
水科学研究所

人間生活学科は2014年度参加者5名、2015年度は4名であった。

食物栄養科学科は2014年度参加者10名、2015年度は11名であった。

両学科とも実習後に下級年次生も参加可能な発表会を開催している。会は盛況で学生たちの討論や感想アンケートでは、自分の職業観を養う上で刺激を受けたと好評であった。また、企業側の人たちに生活科学部の学生が日ごろ学んでいる専門分野の内容と学生たちの能力を知って頂く貴重な機会になっていることも重要である。以上のように、インターンシップの実施は、キャリア支援教育を推進する観点から有意義であると考えられる。問題点としては、現在のところ法人、企業など受入れ先が限られていることもあり、実習の参加人数が少ない（制限している）ことで、今後実習の機会を拡大することが検討課題と言える。

関西地区 FD 連絡協議会第 8 回総会参加報告

教育・研究推進センター主任 山田 恭正

2015年 5 月23日（土）、関西地区 FD 連絡協議会第 8 回総会が京都大学百周年時計台記念館において、68の法人から154名が参加して開催されました。プログラムは以下の通りです。

プログラム

- 13：00 総会（於：百周年記念ホール）
進 行：竹村 治雄（大阪大学）
開 会 挨拶：高橋 哲也（大阪府立大学）
- 13：10 講演 1 「学習評価の新たな潮流～ループリックの意義と課題～」
松下 佳代（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）
講演 2 「主体的な学びとアクティブラーニングの違い」
溝上 慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）
- 14：50 議事
議 長：飯吉 透（京都大学）
①平成26年度活動報告について
②関西地区 FD 連絡協議会の今後について
③平成27年度活動方針について
④平成26年度決算について
⑤平成27年度予算について
⑥次期幹事校の選出について
- 16：15 ポスターセッション「FD 活動報告会2015」（於：国際交流ホール）
17：30 閉会挨拶

講演 1：京都大学高等教育研究開発推進センター教授の松下 佳代先生は、ループリックの意義は、学修(学習)成果の評価の透明性を高めること、教員間で評価基準を共有することを可能にすること、パフォーマンスの「質」を量的表現に変換する働きをもつこと等であり、また同時にループリックのもつ内在的、外在的課題についても解説された。

講演 2：京都大学高等教育研究開発推進センター教授の溝上 慎一先生は、大学コンソーシアム京都主催の2014年度第20回 FD フォーラムでも、ほぼ同じ内容で既にご講演頂きました。

議事に関して

- 1) 平成20年 4 月26日に総会で決定された規約の一部が改正されました。規約が制定されて7年を経た現状に鑑みて、議決を速やかに行うことが可能になるように審議され、以下のように改正されました。

第 3 章 組織（総会に関する規定）

第 6 条 7 会員校は、総会に出席できない場合、あらかじめ提示された議案について、書面により評決することにより、議決に参加することができる。

8 前項のほか、会員校は、書面により他の会員校に議決にかかる権限を委任することができる

る。

9 前2項の場合において、書面を提出した会員校は、総会に出席したものとみなす。

2) 次期幹事校に大阪大学が選出されました。

関西地区FD連絡協議会も第8回を迎えて、より活発で持続性のある協議会にするためには組織の在り方や規約、協議会の運営方法について再検討することが必要になっているように思われました。

株式会社朝日ネット主催 「第17回 manaba セミナー」 に参加して

教育・研究推進センター主任 松下 悦子

開催日時：2015年10月30日（金）13：00～19：30

開催場所：ホテル阪急インターナショナル4階

2015年度秋学期から、本学に於いて授業支援システム「manaba（愛称：マナビー）」が導入されたが、正直なところ、私の担当する科目には不向きであると思っていた。しかし、全学的に導入されたこのシステムに無関心でいることは、ある意味残念ではないかと考え直し、一念発起、「マナビー」についての理解を深めるために、このシステムを作った朝日ネット主催の manaba セミナーに参加することにした。

このセミナーでは、山中伸一氏（文部科学省顧問）による基調講演の後、4会場に分かれて14のセッションが行なわれた。（下図プログラム参照）

私が参加したのは、

「全学 LMS 導入までの道のり」（同志社女子大学 嶋田邦樹氏）

「他システムから manaba へ」（金城学院大学 青柳裕氏）

「manaba 活用 Tips」（立命館大学 木村修平氏 他4名）

の3セッションであった。

以下、私がこのセミナーに参加して、考えさせられたことを少し述べさせていただく。

昨今、以前にも増して、大学での教育改革を叫ばれることが多くなってきているが、今回、山中伸一氏

大学教育改革を加速化するICT事例研究 株式会社朝日ネット 主催 第17回 manaba セミナー		タイムスケジュール			
		A 会場	B 会場	C 会場	D 会場
12:30	受付				
13:00	基調講演 大学が国内外で激しい競争に晒される今、生き残り を かけ、求められる教育改革とは 文部科学省顧問 / 前 文部科学事務次官 山中 伸一 氏				
14:00	休憩				
14:10	セッション1 質的転換答申から高大接続答申へ ～中央教育審議 会答申から見る社会が大学教育に求める変革とは～ 文部科学省 片桐 成彬 氏	セッション2 全学LMS導入までの道のり 同志社女子大学 嶋田 邦樹 氏	セッション3 manaba を「入り口」とした学内サービスとの連携 ～利用設計に基づく manaba 利用率向上への中央大学での取り組み～ 中央大学 久保田 光一 氏	セッション4 活字を通じた大学でのリテラシー教育 ～デジタルで変わる学び、変わらない「新聞の意義」～ 日本 NIE 学会 / 立命館大学 藤澤 伸司 氏	
15:00	休憩				
15:10	Coffee Break ※ホワイエではコーヒー・紅茶のご提供を、各会場では manaba 関連サービスのご紹介を行っております。（詳細裏面）				
15:30	休憩				
15:40	セッション5 5年間の運用実績から見えてきた 利用率アップの施策 東洋大学 藤原 昌仁 氏	セッション6 大人気クラスにおける効率的なアクティブラーニングの実践 ～ manaba コミュニケーション支援アプリ「respon」活用事例～ 小樽商科大学 大津 昌 氏	セッション7 他システムから manaba へ ～選定理由と利用シーン～ 金城学院大学 青柳 裕 氏	セッション8 入学前から国家試験合格までを支える LMSの導入と運用 帝京平成大学 長尾 邦彦 氏	
16:30	休憩				
16:40	セッション9 manaba 活用Tips ～授業での多様な実践事例と工夫～ 立命館大学 木村 修平 氏 東洋大学 須田 伸司 氏 小樽商科大学 中津川 雅寛 氏 立命館大学 藤澤 伸司 氏 神戸女子大学 横山 正子 氏 モデレーター 京都大学 飯吉 透 氏	セッション10 中・高・大と長期的視野に基づくポートフォリオを用いた 学修成果の蓄積 麗台大学 藤田 太郎 氏 / 麗台大学付属平塚中学校・平安高等学校 西川 忠亮 氏	セッション11 SENDプログラムを通じたポートフォリオ活用 ～GGJ事業4年目に見えてきたもの～ 中央大学 藤塚 学 氏	セッション12 主体的な学びを引き出す仕組みづくり 大阪総合保育大学 藤田 朋己 氏	
17:30					
17:40			セッション13 大学教育改革を進める上で、 何故 manaba が必要とされるのか 朝日ネット	セッション14 効果的な学びを実現する教職課程の実践 ～コミュニケーションを重視した manaba の活用事例～ 慶應義塾大学 鹿毛 雅浩 氏	
18:30		懇親会 参加費無料			
19:30					

の基調講演を聞いて、その理由に気付かされた。

山中氏は、今後ますますグローバル化する社会を担う今の日本の若者が、他の国の若者に比べて年々自信を失い、内向きになってきていることを重く受けとめ、彼らに、学習をとおして「目の前の試練を、過去の成果により、乗り越えさせるような経験に基づく自信」を持たせる教育をすることが、今後の日本の発展につながると考えておられた。そして、その「自信」を与える場として、すでに小、中、高等学校では教育改革は始まっており、残るは、いよいよ大学での教育改革が早急の課題であるということであった。

それでは、大学における「自信をもたせる」教育とは、どのようなことなのであろうか。私は、この疑問を胸にセッションに進んだ。

3つのセッションで、manaba を効果的に活用し、「興味をもつこと」の楽しさ、そして、その興味を発展させる「学び」の楽しさを学生に体験させているという、各大学の授業内での試みや事例を聞いた。また manaba を選定した理由の中に、学生一人一人に対応しているシステムがより多く含まれていることも挙げておられた。

総じて、各セッションの担当者が共通して述べられていたことは、個々の学生の意見や考えを「可視化」し、学生全員でそれを「共有」することがとても大切であるということであった。教員の一方的な価値観で進められる授業はもう通用しないということである。いかなる授業環境であっても、学生一人一人を尊重する丁寧な「興味を持てる」授業作りは、ICT（情報通信技術）を使うことによって可能になってきているようだ。この加速化する ICT の時代到来の今、教員自身が勇気をもって取り組み創意工夫すれば、私たちがかつて経験した「学び」の楽しさを、今を生きる学生たちに伝えることができるのではないだろうか。

私自身を省みて、本学のマナビーについて無関心で済ますのはやはり勿体無いと考えさせられたセミナーであった。



2015年度メルマガ「教研ニュース」の発行報告◆

月	教育関係ニュース	トピックス
4月	2015年度春学期授業アンケートについて	FD 関係資料の紹介
	公益社団法人 私立大学情報教育協会からの案内について	FD 関係セミナーの案内
	各種アンケート実施結果の公開について	
5月	2014年度秋学期成績資料の配付について	FD 関係資料の紹介
	2015年度春学期授業アンケートについて	FD 関係セミナーの案内
		クリッカーについて
6月	2015年度春学期授業アンケートについて	FD 関係資料の紹介
	研究者データベースについて	FD 関係セミナー、講演会の案内
		クリッカーについて
7月	2015年度春学期授業アンケートについて	FD 関係資料の紹介
		FD 関係セミナー、講演会の案内
		クリッカーについて
9月	2015年度春学期授業アンケート実施結果の送付について	FD 関係資料の紹介
	2015年度 FD 講習会の開催について	FD 関係セミナーの案内
	研究業績のデータベース登録について (お願い)	クリッカーについて
10月	2015年度秋学期授業アンケート実施について	FD 関係資料の紹介
	2015年度在学生アンケートの実施について	FD 関係セミナーの案内
	研究業績のデータベース登録について (お願い)	クリッカーについて
11月	2015年度秋学期授業アンケート実施について	FD 関係資料の紹介
	2015年度在学生アンケートの実施について	FD 関係セミナーの案内
		クリッカーについて
12月	教員研究・教育活動等報告書2015について	FD 関係資料の紹介
	2015年度秋学期授業アンケート実施について	FD 関係セミナーの案内
	第21回 FD フォーラムについて	クリッカーについて
1月	2015年度秋学期授業アンケートについて	FD 関係資料の紹介
		FD 関係セミナーの案内
		クリッカーについて
3月	2015年度秋学期授業アンケート実施結果の送付について	FD 関係資料の紹介
		FD 関係セミナーの案内
		クリッカーについて

FD 活動報告 (2015年度) ◆

分 類

- 1 本学 FD 事業関係
- 2 学外における FD 活動
- 3 FD 関係会議

1 本学 FD 事業関係

実施時期	活動内容等	実施組織等	概 要
3月	学芸学部第1回 FD 研究会	学芸学部	各学科取組紹介
	2015年度 新任教員対象 FD ガイダンス	総務部主催	新任教員に対し、本学 FD 事業のガイダンス実施 (懇談含む)
4月	2015年度 新入生アンケートの実施	全学部・学科 教育・研究推進センター	新入生全員に対するアンケートを実施
	2014年度 在学生アンケート、 大学院生アンケート 実施結果の公開	教育・研究推進センター	本学 HP にて在学生アンケート、大学院生アンケート実施結果を公開 (学内アクセス限定)
	FD 広報 メルマガ「教研ニュース」 第12号	教育・研究推進センター	メルマガ「教研ニュース」第12号の配信
5月	FD 広報 メルマガ「教研ニュース」 第13号	教育・研究推進センター	メルマガ「教研ニュース」第13号の配信
6月	FD 広報 メルマガ「教研ニュース」 第14号	教育・研究推進センター	メルマガ「教研ニュース」第14号の配信
	2015年度 新入生アンケート 実施結果の公開	教育・研究推進センター	本学 HP にて新入生アンケート実施結果を公開 (学内アクセス限定)
7月	2015年度春学期授業アン ケートの実施	教育・研究推進センター	実施期間 7月6日 (月) ~7月30日 (木)
	FD 広報 メルマガ「教研ニュース」 第15号	教育・研究推進センター	メルマガ「教研ニュース」第15号の配信
8 9 月	2015年度春学期授業 アンケート実施結果の送付	教育・研究推進センター	授業アンケート実施結果の配布と授業評価コメントの作成依頼
	2015年度春学期授業 アンケート実施結果の公開	教育・研究推進センター	本学 HP にて授業アンケート実施結果 (全科目) を公開 (学内アクセス限定)
	FD 広報 メルマガ「教研ニュース」 第16号	教育・研究推進センター	メルマガ「教研ニュース」第16号の配信
	薬学部第1回 FD 講習会	薬学部	講演 「ループリック法による成績評価」 講師 安原 智久氏 (摂南大学薬学部准教授)
10月	FD 広報 メルマガ「教研ニュース」 第17号	教育・研究推進センター	メルマガ「教研ニュース」第17号の配信
	2015年度 FD 講習会の開催	教育・研究推進センター主催	講演 「大学教員のためのインストラクショナルデザイン入門」 講師 向後 千春氏 (早稲田大学人間科学学術院教授)

実施時期	活動内容等	実施組織等	概要
11月	2015年度 在学生アンケートの実施 大学院生アンケートの実施	全学部・学科 教育・研究推進センター	在学生、大学院生全員に対するアンケート調査を実施
	FD 広報 メルマガ「教研ニュース」 第18号	教育・研究推進センター	メルマガ「教研ニュース」第18号の配信
12月	FD 広報 メルマガ「教研ニュース」 第19号	教育・研究推進センター	メルマガ「教研ニュース」第19号の配信
	第4回アクティブ・ラー ニング研究会の実施	教務部 教育・研究推進センター	アクティブ・ラーニング実践報告： 関口 英里 先生(情報メディア学科) マナビー使用実践報告： 森山 由紀子 先生(日本語日本文学科) マナビー使用実践報告： 記虎 優子 先生(社会システム学科)
1月	2015年度秋学期授業 アンケートの実施	全学部学科 教育・研究推進センター	実施期間 1月6日(水)～1月25日(月)
	FD 広報 メルマガ「教研ニュース」 第20号	教育・研究推進センター	メルマガ「教研ニュース」第20号の配信
	第5回アクティブ・ラー ニング研究会の実施	教務部 教育・研究推進センター	アクティブ・ラーニング実践報告： 村上 恵 先生(食物栄養科学科) マナビー使用実践報告： 木津 良一 先生(医療薬学科)
3月	2015年度秋学期授業 アンケート実施結果の送付	全学部学科 教育・研究推進センター	授業アンケート実施結果の配布と授業評価コメントの作成依頼
	2015年度秋学期授業 アンケート実施結果の公開	教育・研究推進センター	本学 HP にて授業アンケート実施結果(全科目)を公開
	FD 広報 メルマガ「教研ニュース」 第21号	教育・研究推進センター	メルマガ「教研ニュース」第21号の配信
	FD レポート第9号の発行	教育・研究推進センター	全専任教員および各部署に配布

2 学外における FD 活動

実施時期	活動内容等	参加者等	概要
5月	関西地区 FD 連絡協議会 第8回総会	教員・職員	京都大学にて開催
	大学 FD 学修会2015	職員	山王健保会館にて開催
6月	NEW EDUCATION EXPO 2015 大阪	職員	大阪マーチャングイズ・マートにて開催
9月	教育改革 ICT 戦略大会	教員・職員	アルカディア市ヶ谷にて開催
	関西大学ラーニングコモン ズ施設の見学	教員・職員	関西大学千里山キャンパス
10月	教職員能力開発拠点事業 in 京都 ファカルティ・ディ ベロッパ―養成講座	職員	キャンパスプラザ京都にて開催
	第17回 manaba セミナー	教員・職員	ホテル阪急インターナショナルにて開催
12月	平成27年度 地域別事業活 動報告交流会	教員	関西大学千里山キャンパスにて開催

実施時期	活動内容等	参加者等	概 要
2月	平成27年度 大学教員の企業現場研修	教員	内田洋行株式会社にて開催
3月	2015年度 第21回 FD フォーラム	教員・職員	京都外国語大学にて開催

3 FD 関係会議等

実施時期	活動内容等	実施組織等	概 要
4月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2015年度 FD 講習会 講師・テーマについて
5月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2015年度 FD 講習会 講師について FD 関係研修案内について
6月	FD 推進事業内容について	センター主任会	関西地区 FD 連絡協議会 第8回総会について 2015年度新入生アンケートの結果について
7月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2015年度 FD 講習会について
9月	FD 推進事業内容について	センター主任会	FD 講習会について FD レポート第9号について 2015年度秋学期授業アンケートについて 2015年度在学生アンケートについて 次年度以降各種アンケートについて
10月	FD 推進事業内容について	センター主任会	FD 講習会について 2015年度春学期授業アンケートについて 大学院生アンケートの件 授業アンケートの件
11月	FD 推進事業内容について	センター主任会	FD 講習会について 各学部教育取り組みについて 授業アンケートの件
12月	FD 推進事業内容について	センター主任会	大学院生アンケートについて FD フォーラムについて 現代社会学部教育取り組みについて 授業アンケートの件
1月	FD 推進事業内容について	センター主任会	FD レポートについて 大学院生アンケートについて FD フォーラムについて 学芸学部教育取り組みについて 2016年度新入生アンケートについて 2016年度 FD 講習会 講師・テーマについて 2016年度 FD 事業概要・日程について 授業アンケートについて
2月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2016年度新入生アンケートについて 2015年度在学生アンケート実施結果について 2016年度 FD 講習会 講師・テーマについて 2016年度授業アンケートについて
3月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2016年度授業アンケートについて 2015年度在学生アンケート実施結果について 2016年度 FD 講習会 講師・テーマについて

2016年度 FD 事業の概要・日程◆

FD 事業の概要

I 教育活動の公表

1. 本学教員の教育活動について、本学 HP 上の「研究者データベース」で公開する。
2. 本学教員の教育活動について、『教員研究・教育活動等報告書』として冊子で公表する。

II 授業アンケート

3. 「学生による授業評価」 授業アンケートを春秋年 2 回実施する。
4. 「科目区分代表者及び科目担当者へのフィードバック」 授業アンケート実施結果、及び同一科目区分の学生評価平均値及び大学全体の学生評価平均値データをフィードバックする。(春秋年 2 回)
5. 「授業の改善状況把握」 教員個々の授業アンケート実施結果を蓄積管理する。
6. 学生による授業アンケートの結果に対して科目担当者及び科目区分代表者がコメントを記載し、「授業評価報告」として本学 HP で公開する。(春秋年 2 回)

III アクティブ・ラーニング研究会

7. 授業の改善を目的として、アクティブ・ラーニングに関する事例紹介等を実施する。

IV FD 講習会等の開催・案内

8. 本学主催 FD 関係講習会等を開催する。
9. 学外で開催される FD 講習会等を学部学科、関係教員に案内し、FD に対する意識向上に努める。

V 新任教員 FD ガイダンス

10. 本学 FD 事業に関わるガイダンスを、総務部が所管する入社前オリエンテーションの中で行う。

VI 新入生・在学生アンケート

11. 学生生活全般にわたる満足度、学業等における成長度、教育改善 (FD) 効果、本学への帰属意識等の実態について経年で把握できるようにする。

VII FD の啓発・広報関係事業

12. FD 啓発誌『FD レポート』を発行する。(年 1 回)
13. メルマガ「FD ニュース」を配信する。(月 1 回配信)
14. 当センターの FD 事業内容及び FD 活動報告を本学 HP 上で情報を公開する。

VIII 大学院 FD 推進事業

15. 大学院生アンケートを実施する。
その他の FD 活動。

IX その他 FD 関係の支援

16. FD 関係図書・資料等を収集し 教職員への貸し出し・利用に提供する。
17. FD 関係講習会等の参加費・出張費等を補助する。
18. クリッカーを教員に貸し出しする。
19. その他、本学 FD に関すること。

2016年度 FD 事業日程（予定）

春学期

- 3月 ・ 新任教員入社前オリエンテーション FD ガイダンスの実施
- 4月 ・ 新入生アンケートの実施
- 7月 ・ 春学期授業アンケートの実施
- 9月 ・ 授業アンケート実施結果送付とコメント依頼
- 10月 ・ FD 講習会の開催

秋学期

- 11月 ・ 在学生アンケートの実施
・ 大学院生アンケートの実施
- 1月 ・ 秋学期授業アンケートの実施
- 3月 ・ 授業アンケート実施結果送付とコメント依頼
・ 大学コンソーシアム京都主催「FD フォーラム」への参加
(各学科2名以上の参加を依頼)
・ 『教員研究・教育活動等報告書』の発行
・ 『FD レポート』の発行

年間を通して

- クリッカー貸し出し
- アクティブ・ラーニング研究会の開催
- 学外で開催される FD 関係講習会等を案内、参加費・出張費等の補助
- FD 関係資料・図書等を収集、貸し出し
- メールマガジン「FD ニュース」を配信（月1回配信）

編集後記

同志社女子大学は、良心教育を柱として、キリスト教主義、国際主義、そしてリベラルアーツを核とした教育を進めている。そのような目標を実現するためには、教育の内容・方法を学生や社会環境に合わせ随時改善・進化させなければならない。そのために、大学をあげて、FD活動に取り組んでいる。本レポートは、今年度における同志社女子大学でのFD活動をまとめ、報告するものである。

本レポートに示されているように、今年度も本学では、教職員全体でFD活動への取り組みが進められた。全学レベルでのFD講習会およびアクティブ・ラーニング研究会が開催され、多数の教職員がこれに参加している。また、各学部・学科単位でもそれぞれの学部・学科の教育分野の特性に応じた教育の内容・方法の改善のための取り組みが進められている。そして、FDフォーラムはじめ、学外での各種のFD関連の会合に参加する教職員も少なくなく、他大学での事例等に関する情報収集を行い、本学での活用に向けて検討を行い、実行へと繋げていっている。今レポートでは、このような様々なレベルでの取り組みが積極的に行われていることを紹介している。

大学が、世の中の動きに対応していかなければならないことは既述の通りだが、新しい技術等を積極的に取り入れ、教育の効率化を目指さなければならないのも当然である。本学では、今年度の夏に教育支援システム（愛称マナビー）を新たに導入した。実際の運用は秋学期からであったが、各講義における受講生の把握や教材の配布、そしてレポートや小テストなどをオンラインで実行できるシステムである。このようなシステムは、インフラとして、より一層きめ細やかな学生への対応や授業改善に貢献することが期待される。しかし、システムはあくまでシステムであり、これを活用しないと「猫に小判」ともなりかねない。システムは「容れ物」であるから、そこに入れるコンテンツを充実しなければ利用価値は生まれない。システムの利用価値を高めるために、教室内のネット環境充実などの基盤整備と共に、教職員にも学生にも利用する価値があるコンテンツ開発が求められるだろう。

新年度以降は、事務組織改編によって、教育・研究推進センターはFD活動を担当しなくなるが、教務部門がこれを引き継いで進めていくこととなる。教務分野と一体化することで、これまで以上に教育の現場と緊密に連携したFD活動、そしてその結果として大学全体の教育内容・方法が改善されていくこととなることを期待したい。

教育・研究推進センター主任 大津 正和

FDレポート 第9号

2016年 3月 発行
同志社女子大学 教育・研究推進センター
〒610-0395 京都府京田辺市興戸
TEL (0774) 65-8679 FAX (0774) 65-8680
E-mail:kyoiku-i@dwc.doshisha.ac.jp
ホームページ <http://www.dwc.doshisha.ac.jp>

